

# 清華簡楚居の發現と楚国歴史地理研究

谷口 満

## 序

楚国の歴史と文化を研究する者にとって、もっとも悩ましい問題は、既存文献伝承にみえる都城や重要な城邑などの位置が、はっきりとは判明していないという問題である。もちろん先秦諸国のほとんどは、その歴史地理において未解決の懸案問題を、多かれ少なかれいくつか抱えているのであるが、楚国の場合、西周時代の楚族の居地丹陽と春秋戦国時代の都城郢都の位置をはじめとして、その位置が判明していない地名の例はあまりにも多く、しかもそれぞれの異論が主張するその比定位置が彼此相互にあまりにもかけ離れていて、その事情の複雑さは量においても質においても、他の先秦諸国のそれらの比ではないのである。

一九七〇年代における江陵紀南城遺跡の発掘を皮切りに、楚国考古学はめざましい展開をとげてきているが、その新しい考古資料を用いて解明しようとしている第一の問題は、ほかならぬこの歴史地理上の懸案問題であるといっても、決して誇張ではない。事実、新しい考古遺跡や考古遺物が発見されると、その考古報告の公表と同時に、必ずといってよいほど、その考古新資料を導入した歴史地理上の新見解が公表されるのであって、そのことは発

刊以来ほどなく総一二五号を迎える『江漢考古』をいく冊か手にとって目次を眺めてみれば、一目瞭然なはずである。歴史地理上の懸案問題は、楚史楚文化研究者の頭中に完全に入り込んでしまつて、もはや離し出すことが不可能なのであろう。

それに困つたことにとすべきか、考古新資料が増加すればするほど異論百出の状態に拍車がかかり、意見は収束していくどころか、かえつてより細かくより複雑に分散しつつあるように見える。というのも、発見が続いている考古遺跡や考古遺物は、ほとんどの場合、それだけではそれが楚族の居住地なのかどうか、楚文化の器物なのかどうか、判定がきわめて困難なものばかりなのであるが、他面それはどれもが楚族の居住地であり、どれもが楚文化の遺物である可能性をもつことでもあり、多くの研究者がその一縷の可能性にかけて、歴史地理上の新見解を次々と提出するのが常態化してしまつていからである。考古新資料が増加するのはもちろん歓迎すべきではあるけれども、こと楚国歴史地理研究の懸案問題に限つていえば、その増加が問題の解決にかえつて「あだ」になつていようすら思えてくるのである。

こういつた情況が三十年以上も連続しているのであるから、おそらく楚史楚文化研究者の多くは、楚国歴史地理研究の現況に対

して、いささかの戸惑いといささかの疲労を感じているのではな  
 かるうか。そして恐らく誰もが、一種困惑状態にあるといつてよ  
 いこの局面を一挙に打開するような、新しい考古資料が登場する  
 ことを切望しているにちがいない。その場合の考古新資料とは、  
 以上の事情からして従来通りの考古遺跡や考古遺物ではあるはず  
 がなく、それ以外の考古資料でなければならぬが、現今の考古  
 発見状況を考慮すれば、それは当然、いわゆる戦国楚簡において  
 他はないはずである。遺策・卜筮祭祷文書・司法文書、そして思  
 想文書などなど、さまざまな種類の戦国楚簡が大量に出土してき  
 ている以上、歴史地理関係文書も早晚発現するであろうと期待を  
 抱くのは無理からぬところであろう。出土文字資料という考古資  
 料によって新しい歴史地理資料がもたらされることを、誰もが  
 願ってやまないでいるのである。

そこに今回、清華大学所蔵竹簡のなかに、整理者が「楚居」と  
 仮に名付ける文書が含まれており、それはきわめて重要な楚國歴  
 史地理研究の新資料であるとの報道に接したのであるから、ほと  
 んど小躍りするに等しい気持ちだが、研究者全員の心中に昂じたに  
 ちがいない。はたして公刊された清華大学出土文献研究与保護中  
 心編・李学勤主編・上海文芸出版集団中西書局刊『清華大学蔵戰  
 国竹簡（壹）』を開いてみると、後尾に「楚居」が載せられ、楚  
 王の遠い祖先たちにもつわる山名・河川名、西周以前の先王たち  
 の居地、某郢と表記される春秋以降の楚王の居地など、数多い地  
 名が登場していて、もしこれらの半数でもその位置を確定するこ  
 とができれば、楚國歴史地理研究の懸案問題のいくつかが氷解す

るであろうと、誰もが予想するにちがいない内容である。こうし  
 て「楚居」を手にしたその日から、その地名位置の比定に没頭す  
 る毎日となったのである。

その結果は、はたして如何？ まことに残念なことに、どれ一  
 つとして、その正しい位置を提示することができなかった。一、  
 三については、なんとか成案を出せそうであったのであるが、決  
 定的な証拠はやはり見いだせず、自説の提示を断念せざるをえな  
 いでいるのが実情である。もちろんこれは、自身の不才によると  
 ころも大きく、事実、「楚居」公刊直後から数多くの研究者が、  
 その地名位置について矢継ぎ早に意見を公表しつづけてきてお  
 り、その議論の活発さを前にすると、一つとして自説を提示しえ  
 ていない自身の非力さを自覚せざるをえないのである。

しかしながら、それぞれの意見を今一度仔細に検討してみると、  
 どうやらどの学説も必ずしも確たる証拠があつてのことではない  
 ようであり、それは研究者の数だけ異説の数が存在するところに  
 如実に示されている。正解は一つなのであるから、それぞれの研  
 究者が真に決定的な証拠をもってすれば、意見は自ずから一つに  
 帰すべきであるにもかかわらず、そうではなく異説が並び立って  
 いるということは、それぞれの証拠がいずれも真には決定的では  
 ないことを物語っているからである。要するに「楚居」の出現は、  
 楚國歴史地理研究の懸案問題について、意見の収束に向かわせる  
 どころか、より一層その分散化に拍車をかけるという結果を招い  
 てしまっているといわねばならない。

期待が大きかっただけに、この事態にはさすがに悄然とした想

いを禁じえなかったが、二〇一一年一〇月に開催された四省楚文化研究会第十二次年会（湖北省文物考古研究所主管・於武漢）に参加して、さらにその想いを助長させられることになった。予想通り、「楚居」所見地名の位置についていくつかの意見が提出され、甲論乙駁の論争状態を呈したのである。その極めつきは、何といっても北京大学高崇文教授の閉幕式講話であろう。参会した研究者を代表しての講話であるから、あるいは年会の学術的意義を総括されるのではとも予想していたのであるが、そうではなく「楚居」所見地名位置についての自説を淡々と主張するという專題報告で臨まれ、そのなかで、季連・穴熊・熊性・熊繹という四祖先の居地である「京宗」について、高氏はそれは周の鎬京＝宗周であると、はっきり言明されたのである。彼らは周王朝に仕えており、したがって鎬京＝宗周に居住していたはずだというのがその第一の論拠である。京宗の位置についてもさまざま意見が提出されているが、いずれもそれぞれが楚族の故郷と考える河南中部西南部・湖北西北部など、各地のどこかにあてるのが通例であり、その意味において、高氏の意見はきわめて異例な意見であるといわねばならない。高氏が現在における代表的な楚史楚文化研究者であることは誰しもが認めるところであるから、その学説は看過できないはずである。このような特異な意見が著名な研究者から発せられたとすると、論争はとうてい収束に向かうことはないであろう。中国語に不案内な者にも、この部分の発言だけはなぜかはっきりと聞き取ることができたのは不思議であるが、軽い衝撃をおぼえてしばし茫然とするのを、いかんともすることができなかつ

た（高氏のこの際の発言は、その後「清華簡《楚居》」所載楚早期居地辨析『江漢考古』二〇一一年四期として公表されている）。

帰国後も悄然と茫然の念は消えることがなく一年が過ぎてしまったのであるが、その一年後の今に至って突然思い立ったように「楚居」に関する一文を草しようとするのであるから、やはりその理由を示しておかねばならない。戦国楚簡に見える地名といえば、周知のように『包山簡』や『新蔡葛陵簡』にも多数の楚国地名が見えていて、その位置比定が多くの研究者によって試みられたものの、ほとんどが不可能に終わってしまっている。それはそれらの文書はそもそも卜筮祭祷簡が中心であって、文書そのもののなかに地名考証の手がかりがまったく含まれていない以上、いたしかたのない事態であると考えられたのであるが、歴史地理資料の性格をそなえた「楚居」であつても、その文書そのもののなかにやはり地名考証の手がかりはなく、情況は同じなのである。今後、「楚居」と同じような内容の戦国楚簡が発現したとしても、こと所見地名の位置比定については、同じことのくりかえしであろう。

では、なすすべもなくただ悄然・茫然として手をこまねいて見ないければならないのであろうか。地名位置の比定という直接的な手段でもって楚国歴史地理研究の懸案問題に立ち向かうことはできないまでも、何か間接的な手段で立ち向かうことはできないであろうか。その間接的な手段とは、「楚居」には戦国楚国の人々の楚国の過去に対する認識、いわば歴史認識が示されているのであるから、その認識をたよりに、そこに戦国以前の楚国歴史地理

の状況がどのように反映されているかを探りあてていく、という手段において他はないのではなからうか。というより、そのような方法以外に、「楚居」のような出土文字資料を歴史地理研究の資料として生かす道はないのではなからうか。そう思いついて、「楚居」の全文を今一度熟読してみると、懸案問題解決の参考となるような歴史認識がいくつか存在するように思われる。そのいくつかを公表することは、懸案問題の解決に少しでも貢献することになるかも知れない。それが、この一文を草するに至った理由である。

「清華簡楚居の発現と楚国歴史地理研究」という論題には、「楚居」のような出土文字資料は、どのようにして歴史地理懸案問題解決の資料として活用したらよいであろうか、という意味合いをこめているのである。思えばこのような方法は、誰もが常識的に考えつくことであって、一年間も気がつかなかったこと自体まことにかつといわねばならないが、地名位置比定がまったくできなかった衝撃があまりにも大きく、悄然・茫然としたまま月日が経過してしまったことを、いいわけとして白状しておかねばならない。

学術論文の序文は、論文の意義・方法などを、なるべく簡要に淡々と綴るべきを旨とすべきであることからして、以上の序文は私情に及ぶこともあり、しかも冗長で、紙幅の無駄遣いであるとのそしりを免れないであろう。そのことは十分自覚しているのであるが、しかし、「楚居」を手にして以来ここ二年あまりの心情を、一端でも記しておくことは、ただ個人的な心情を吐露するにとど

まらず、おそらく楚国歴史地理研究の資料的現況を伝えることにもなるであろうと考えて、あえてそのまま載せさせていただくことにした。ご容赦願いたいと思う。

なお、公表された「楚居」に関する論文は、手にしたものだけでもすこぶる多い。その全部を読み終えていないばかりか、所在を知らながら複写を手にいれていないものもある。この点、あるいは本稿の内容と同じものがすでに公表されている可能性がないとはいえない。もしすでに公表されているものの存在に気づかれた方は、是非ご一報いただきたい。次回、関連の論文を草する際にそのことを注記して、先に意見を述べられた研究者のプライオリティを明確にしたいと思う。本邦研究者の関連論文は必ずしも多くないようであるが、浅野裕一「清華簡『楚居』初探」(浅野裕一・小澤賢二『出土文献から見た古史と儒家経典』汲古書院・二〇一二年、初出『中国研究集刊』五三三号)と小寺敦「清華簡『楚居』譯注」(『出土文献と秦楚文化』第6号)はその代表作である。「楚居」を読むための情報と意見がふんだんに盛り込まれていて、本稿の執筆においても多くの点で参照させていただいた。あえて美を掠めず、あらかじめとくにことわっておきたい。

\*以降、清華簡のテキストとしてはいうまでもなく『清華大学蔵 戦国竹簡(壺)(弑)』を用いることとし、それに付されている李守奎氏らが中心となって作成した〈注釈〉を適宜引用することにする。また清華簡以外の楚簡を引用する場合は、釈文は原則として陳偉主編『楚地出土戦国簡冊「十四種」』(二〇〇九年・経済科学出版社)、原字はそれぞれの專題報告書の原字を引用



するものとする。

\*一節でとりあげる①②③、二節でとりあげる(1)(2)(3)(4)の記事は、「楚居」全文積文のそれぞれの部分に筆者がつけた傍線番号に対応する。

\*周知のように、既存文献伝承の楚王名号「熊」は「楚居」では「奮」に、「敖」は「囂」に作っている。もちろん音通同義であり、以下には熊と敖で統一して用いることにする。

\*なお本稿は、平成二四年一二月八日、成城大学を会場に開催された中国出土資料学会例会において、「清華簡楚居の発現と楚國歴史地理研究」と題して実施した口頭発表の内容に加筆訂正して執筆したものである。当日は準備不足から、予定内容の半分も公表することができなかったばかりか、きわめてあいまいな立論に終始してしまった。会場でお聞き下さった皆さんにあらためておわびするとともに、本稿をもって当日の口頭発表内容に代えさせていただくことを、お許しねがいたいと思う。

### 一 字積・文意についての私見及び「楚居」の資料的性格

本学勤をトップとする整理者たちによる「楚居」の積文は次のようなものである(8頁)。

全文の大意については、整理者・浅野氏・小寺氏、その他の研究者の間に、それほど大きな意見の違いはないようであるが、個々の字積や文意となると、それこそ異論百出の状況である。絶対的な確信をもつてのものではないものの、個々の字積・文意につ

ては、提出可能な私見がいくつか存在する。まずそれらを提示しておきたいと思う。

#### ① 遯出于喬山



問題となるのは遯であり、これに対する〈注釈は〉「遯、即「前進」之「前」。《礼記・中庸》注：「亦先也。」であつて、それに従うとするとここは「進出して喬山に出た(至った)」という文意になる。それでも十分に文意は通じると思うが、実はこの遯については〈注釈〉とは異なった意見が数種類提出されており、なかでもっともラディカルなのは凡国棟氏の意見である(凡国棟)。凡氏は遯の字義についての諸説をあげたうえで、どれもがいま一つ納得できないとして、実はこの部分には誤記があり、遯は喬の下にくるべきであつて、「出于喬遯山」というのが本来の字順であると主張しはばからない。そうするとつまり「喬遯山に出た(至った)」というのがこの文意ということになり、その喬遯山の位置についても、凡氏は独自の見解を提出している。字順を訂正するのであるから、きわめて大胆な意見ということになる。凡氏の意見にはにわかに従いかねるが、その大胆さに後押しされて、私見を提出してみた。

整理者の字積のうち、遯については異論ないであろう。止については、はたしてこの通りでよいのかどうか何ともいえない。そこで残るのは、「舟」の当否ということになるのであるが、見てのとおり原字がやや不鮮明なのは何とも残念で、これだけでは判定しにくい。そこで他の戦国楚簡のなかによく似た字形をさがしていくと、たとえば『包山簡』一三一・二三六・一三七に人名とし

て、整理者が「辵」と積している例があり、その原字は、

𨔵 (一三二) 𨔵・𨔵 (一三六) 𨔵 (一三七)

である。また『郭店簡』「太一生水」にも、同様に整理者が「辵」と積している例があり、その原字は、

𨔵 (「太一生水」六)

である。「楚居」の整理者たちは、おそらくこういった事例を念頭におきつつ、形や傾きに若干の差はあるものの、『包山簡』や『郭店簡』「太一生水」のその変形体とみて、不鮮明ながら「楚居」のそれにおいても、辵の右側を「舟」と積したのに相違ない。もし整理者のこの判定が正しいとすると、実はその字義について興味深い想定が浮かんでくる。

『包山簡』と『郭店簡』「太一生水」のこの字形は、実はきわめてよく似たものが『郭店簡』「老子甲」にも見えている。

以逾甘露 𨔵 (老子甲・一九)

〔注釈〕は、<sup>レ</sup>逾、簡文从「△」从「舟」从「止」。帛書本作「俞」、整理者認為「俞」、疑讀為揄或輸。可從。<sup>レ</sup>となっていて、それに従うとするとここは「甘露を運び致す」といった文意になる。もちろんこの意見についても異なった意見が多数提出されている。丁四新氏が詳細な比較検討を行っているが(丁四新)、やはり注目すべきは陳偉氏の意見ではなからうか(陳偉)。

陳氏は、この部分が今本老子・三十二章では「以降甘露」となっていることなどを根拠に、この字の字義を「降(下る)」ととらえ、そしてこの字形は『鄂君啓節』「舟節」の「逾」と同形であるから、舟節のこの字もまさしく「降(下る)」「流れにしたがって下る」

という字義になるとして、『鄂君啓節』解説における年来の懸案問題に決着をつけているのである。

『鄂君啓節』「舟節」において、この字は必ず河川名の前についており、「舟節」全文の通読上、「降(下る)」「流れにしたがって下る」という字義以外を当てることは不可能であろう。丁氏は全幅の信頼をおいていないようであるが、『鄂君啓節』「舟節」の解説が一挙に明快になるという魅力には抗しがたい。陳氏の意見に従って、「降(下る)」「流れにしたがって下る」という字義を前提にすべきであると思う。

『郭店簡』「老子甲」一九の逾と『包山簡』(一三一・一三六・一三七)・『郭店簡』「太一生水」六の辵は、厳密には同じ字形ではない。最大の差異は、前者に△があるのに対して後者にはそれがなくことである。しかしどちらも辵と舟を成分としてもっており、少なくともこれが動詞として使用される場合は、その字義において、同じ方向性をもっていることは疑いない。『包山簡』の例は人名であるからしばらくおくとしても、動詞として使用されている『郭店簡』「太一生水」の例は、その字義においてほぼ同じ方向性を見いだすことができるはずである。

周知のように「太一生水」には、太一↓水↓天地↓神明↓陰陽↓四時↓滄熱↓濕燥↓歳という生成順序と歳↑濕燥↑滄熱↑四時↑陰陽↑神明↑天地↑水↑太一という逆生成順序が記されており、「太一生水」の作者がここに太一から出発して太一に帰着する循環を想定していることはまちがいない。そして、この部分に

是古(故)大(太)一贗(藏)於水、行於時、逝(周)而或  
(又)□、□□□

と記しており、これが「太一」という根本存在は、水のなかに保持されておき、その太一は水↓天地↓神明↓…神明↓天地↓水と姿を変えながら循環し、ぐるりと循環して…」という文意であることもまちがいない。その「ぐるりと循環して」という意味を示す動詞として「めぐ」、つまり逝が使用されているのである。(周)は整理者の解釈であり、整理者が当てているこの「周行」という字義は、ほとんど「循環」と同義であると見てよいであろう。「周」という字義をもつ動詞として「逝」という動詞が措定されているのは、両者の音が通ずるというだけの理由からではもちろんあるまい。「舟に乗って流れにしたがって下る」という、周行⇨循環に相応ずる字形上の意味をもつからこそ、この「逝」が措定されているのである。考えてみれば、水はその通有性・融通性からして、根本存在である太一が運行する際の「乗り物」としてまことにふさわしく、したがって太一はその運行手段としての水をまず最初に生成するのである、というのが「太一生水」思想の主旨の一つであるとするならば、その運行⇨循環が、「舟に乗って(水の)流れにしたがって下る」ようにと表示されるのも、文字表記としてまことにふさわしいであろう。

このように「郭店簡」「老子甲」の逾⇨「郭店簡」「太一生水」の逝がいずれも、「降(下る)⇨流れにしたがって下る」という基本字義をもっているとなると、その変形体である「楚居」の「遊」もおのずから同じ「降(下る)⇨流れにしたがって下る」と

いう字義をもっている可能性は、きわめて高いことになる。いささか長い説明になってしまったが、問題となっている「楚居」のこの部分は、

(ある河川の)流れにしたがって下り、喬山に出た(至った)という文意にとるべきであるというのが私見である。語法的には、同じく清華簡に含まれる「繫年」が伝える「文王以北啟出方城」(「繫年」二九)の「啟出方城」(国土を開拓して方城に出た〔至った〕)と同じ用法とみてよいであろう。

② 季戀解元又鳴從及之盤爰生緹白遠中

郭六>楚居>楚居

問題は「從及之盤」の文意であるが、「注釈」は盤を「泮」(水涯)と解釈して、「(季連は)妣佳という女性を追いかけて、泮(水涯)で追いついて、そこで結ばれた」という文意にとっているようである。小寺論文の注【二四】に諸説が網羅されているが、異論を決するのはどうも言い不可能なのが実情である。「楚居」のこの部分は、おそらく季連の次に登場している穴熊にまつわる伝承にあるように思われる。

穴熊は妣戯という女性を妻とし、そこに恒雷と麗季という二子が生まれるのであるが、麗季が出生する際の分婉はきわめて異常で、母の脇腹が割り裂かれて生まれてきたのだという。〈注釈〉は、『史記』「楚世家」が伝える、陸終(祝融)六子がやはり母の脇腹から出生したという伝承を引いて、麗季のこの出生伝説も同工異曲のものであろうことを示唆している。楚国におけるこのよ





うな異常出生伝説の意味を考えるためには、楚国の伝説のなかでもとりわけよく知られている、虎乳子文伝説を想起する必要があるろう。

若敖は邳から妻を娶り、鬬伯比が生まれた。ほどなくして父若敖が死ぬと、鬬伯比は母とともに邳に身をよせ、そこで生育したが、邳君のむすめと淫通し、子文を生んだ。邳君の夫人は、不義の子であるからと、この乳児をこっそりと夢（雲夢沢）に棄てさせた。ある日、邳君が雲夢沢に狩りにいくと、虎がその乳児に乳を飲ませているのに出くわした。こわくなって帰ったが、夫人はこの顛末を邳君に告白した。そこでこの乳児を収容して育てることにしたのである。楚国の人々は、乳のことを穀とよび、虎のことを於菟とよんだから、この子に穀於菟と名付け、そのむすめを正式に鬬伯比の夫人とした。この乳児こそが、つまり令尹子文に他ならない（『左傳』宣公四年・意識）。

春秋楚国の代表的な賢人政治家である鬬穀於菟（子文）の出生と生育にまつわるこの伝説は、子文のような尋常ならざる賢人は、その出生や生育からして尋常ではなかったことを伝えており、その不正常性はつまり、彼が常人としての衆人とはまったく異なった存在であること、いかなれば一種の「聖性」をもっていたことを表示しているであろう。その不正常性をもっとも顕著に示しているのが、虎乳によって生育したという伝説であることはいうまでもない。

穴熊と妣戯の間に生まれた二人の子のうち、麗季が割り裂か

れた母の脇腹から出生したという伝説は、子文の場合は出生後の生育における不正常性であり、麗季の場合は出生情況そのものにおける不正常性という違いはあるけれども、子文の場合と同様、麗季の聖性を表示していることはまちがいないであろう。そしてその聖性はまた、母妣戯と父穴熊の聖性でもあるはずである。

「楚居」を一見すれば明らかのように、『史記』「楚世家」などに登場している神話・伝説上の存在と目される祖先のうち、「楚居」に登場しているのは季連と穴熊のみである。それはおそらく、この両者こそが楚国の開国者・定礎者と認識されていたからであり、そのことは、両者にまつわる伝承が開国・定礎といった事情にふさわしいそれらであることに十分示されているであろう。こういった開国伝説・定礎伝説には、いわゆる感生伝説や棄子伝説など、不正常性をモチーフとする伝説がつきものであり、穴熊・妣戯夫妻の子麗季に付けられた脇腹出生伝説は、そのような伝説の一つに他ならない。

とすると、穴熊の前、すなわち祖先世系の冒頭に配置されている、文字通りの開祖である季連についても、彼にまつわる伝承のなかに、そういった不正常性を主旨とする伝説があつてしかるべきではなからうか。それは当然、季連・妣佳の結婚とその二子緹白・遠中の誕生を伝える伝承のなかに存在していると考えねばならない。そこで関連する記事を今一度読んでいくと、仔細に読みまでもなく、緹白・遠中の出生情況や生育事情にまつわる不正常性はまったく記されていない。したがって、不正常性は残る季連・妣佳の結婚事情に示されていると見なければならぬこ

となるが、それが何かについては、これも虎乳子文伝説のなかに、重要な類例を見いだすことができるであろう。虎乳子文伝説における不正常性とは、虎乳による生育はもとよりとして、雲夢沢に棄てられたというのもそうであろうし、それに父鬬伯比と母邳君のむすめが淫通したというのもそうであろう。『左伝』はここを「淫於邳子之女、生子文焉。邳夫人使棄諸夢中。」と記している、両者の結合が正式でない不義の結合であったことを明示しているのである。

このように推し測つてみると、季連伝承の問題部分「從及之盤」が、季連と妣佳の、正式ならざる、野合のごとき結合を表示している可能性が生じてくるのである。すなわち、前段を、〈注釈〉を援用して「季連は、妣佳にはすでに正式の結婚が決まっていることを聞き」という文意にとり、「從及之盤」は、

追いついて野合を試みてそれを実行し

という主旨をもっているはずだというのが、私見なのである。この理解は、劉樂賢氏の解釈とほとんど同じである(劉樂賢)。ただ、そうなると、**盤**は野合の場所か、あるいは野合そのものを示す動詞か、あるいは野合についてのその他の何らかの表記か、ということになるが、それについての私見はまことに残念ながら提出することができない。私見が提示するのは、劉氏が試みているような字形・字義上からの解釈ではなく、伝説内容の一つの蓋然性から割り出した解釈にとどまるものであることは、この点、やはりあらためてことわっておかねばならない。

ともあれ、季連伝承の中にも穴熊伝承の中にも不正常性をモ

チーフとする伝説が存在しているとすると、両者の伝承を楚国の開国・定礎のそれとして受容していた楚国人々は、そこに開国・定礎時代の祖先たちの聖性を見てとって、その開国・定礎の意味あいをも、より納得して受容することができたことになろう。

### ③ 媯糞羊先尻于京宗

「楚居」のなかでも、その文意解釈がもつとも困難な一文である。〈注釈〉は、前段を季連と妣佳の間に生まれた二人の子、緹白と遠中の生育が順調であったという文意にとっているが、その解釈の根拠は今一つはつきりしない。小寺論文の注【二二六】【二二七】に紹介されている諸説をみても、やはりどれもが根拠のはつきりしないものばかりで、賛否を提出することが難しい。もとより確証があつてのことではないが、ここでは二つの視点からその文意を推測してみることにはしたいと思う。

一つは、この一文には、後世の楚国人々にとって何かきわめて重要な情報が伝えられているのではないかと思われる点である。季連と妣佳の子緹白と遠中、穴熊と妣麇の子伋吾と麗季、この二組の親子は、後世の楚国人々にとって、開国者・定礎者とか開祖・族祖として意識される存在であり、だからこそそういった存在の常として、前述のような不正常性を主旨とする伝説が付与されているのである。その点見過ごしてはならないのは、季連の脇腹出生伝説に続けて「楚居」がきわめて重要な情報を伝えていることである。それは、割れ裂けてしまった脇腹を、巫が楚(荊棘＝茅状植物)をもって縫合し、それがゆえにこの一族はみずからを「楚人」と称し、その称謂は今日まで続いているという記述

である。族号・国号の由来を伝えているのであるから、これは後世の楚国の人々にとってきわめて重要な情報といわねばならない。この情報が季連の不正常出生に関連して伝えられているのは、族祖として意識されていた彼であればこそであろう。そうすると、緹白と・遠中に関連しても、何か重要な情報が記述されている可能性が高いと思うが、それが問題の一文に示されている内容ではなからうか。

二つは、〈注釈〉はここを「媯裳」の三字で断句しているが、羊の下の先で断句して「媯裳」の四字句に解釈する可能性が、皆無ではないと思われる点である。というのも、『包山簡』や『新蔡葛陵簡』には周知のように次のような記述が見えていて、「某先」という表記が存在しているからである。

- ・ 與禱楚先老僮・祝融・毓(鬻)畜(熊)、各一牂(『包山簡』二二七)。
- ・ 與禱楚先老僮・祝融・毓(鬻)畜(熊)、各兩牂(『包山簡』二二七)。

・ 趨禱三楚先、各一瘁(『葛陵簡』乙三二・四一)。  
 ・ 乙亥禱楚先与五山、…(『葛陵簡』甲三三・一三四一〇八)。  
 いずれも卜筮祭禱簡に見えるものであるが、ここにいう「楚先」とは、どうみても祭禱の対象となっている「楚族の祖先」のことを指している。とすれば、「媯の祖先」を意味する「媯先」という表記が存在しても、おかしくはないはずである。

さて二の視点に従って、三字句の「媯裳」ではなく四字句の「媯裳先」に解釈するとして、一の視点のとおり、その

文意が後世の楚国の人々にとっての重要な情報を伝えているとすると、その情報とはいったい何であろうか。論じてここに至れば、羊という字釈が与えられている「媯」の字形がおのずから注目されるはずであって、この字が『左伝』「昭公十三年」・『史記』「楚世家」などが伝える楚王室の姓「芈」とほぼ同形であることに、容易に気づくであろう。そもそも『説文』は、「芈とは羊の鳴き声である」としており、字義においても羊と芈には通じるものがある。周知のように出土文字資料における楚族の姓は、青銅器銘文に「嬭」の字面で見えている以外、簡帛資料には例がなく、一抹の不安はあるものの、整理者が羊と積している問題の字が、実は「芈」である可能性は高いのではなからうか。もしそうであるとすると、その姓の由来が記されているわけではないけれども、楚族の姓が「芈」であるという、楚という国号・族号の由来に匹敵する、きわめて重要な情報が、緹白・遠中二子の誕生に続けて明示されていることになり、彼らの族祖としての立場を考えれば、その明示の場所はきわめてふさわしいことになる。

要するに、「媯先」とは「羊先」ではなく「芈先」であり、  
 芈姓(楚族)の祖先たち

の意味にとるべきであろうというのが私見である。とすると、「媯裳芈先」という一文の文意はどうかということになるが、これについては「芈姓の祖先たち(緹白・遠中)にとっては子孫たちを繁栄させた」とか「芈姓の祖先たちに血統がうけつがれた」とかという文意ではなからうかという推測を提示するのがせいぜいで、私見めいたものすら提出することができない。媯裳

の意味が、どうしても判明しないからである。

諸賢の高説を否定するのはまことに心苦しく、ことに整理者の苦心の断句に訂正をせまるというのは、いかにも心苦しいが、あえて私見を提出させていただくことにしたい。

以上、字釈・文意について三個の私見を提出した。もとよりつたない意見ではあるが、「楚居」の釈読に少しでも寄与するところがあれば幸いである。

さて、ではこの「楚居」はいったいどのような性格の資料なのであろうか。整理者が「楚居」と名付けたのは、周知のようにその内容をいわゆる『世本』『居篇』のそれと同類のものを見たためであり、したがってその資料的性格を云々するためには、『世本』各種輯本「居篇」の楚国関連記事と「楚居」の記事を比較検討してみなければならぬが、その作業は早くに趙平安氏が試みている（趙平安<sup>1</sup>）。考証の末尾で、趙氏は、「楚居」はいうところの楚史『欒机』の部分的抜き書きか、あるいは『欒机』を基礎に新たに作成したものかも知れない、という興味深い推測を提示してはばからない。これに対して、浅野裕一前掲論文は主に『史記』「楚世家」の内容と比較しながらその異同の意味するところを詳細に論じているが、その資料的性格を直接論じた箇所はないものの、「その意味で、楚の始祖と殷王・盤庚との姻戚関係を語る『楚居』の記述は、従来知られていなかった形で楚人の自立意識を示す資料として注目すべきであろう。」とか「したがって『楚居』が記す麗季の聖誕伝説も、楚人は神秘的な力を備えた格別の存在だと主張するための仕掛けと考えられる。」とか述べて、その性格

がどのようなものであったのかを暗示している（浅野前掲論文）。一方小寺敦氏の意見は今少し踏み込んだもので、「楚居」に見られる楚王の移動範囲が春秋末期から戦国中期の楚の領域をほぼカバーしている点に着目して、戦国中期はそうした領域がしだいに齊や秦によって圧迫されつつあった時期であり、その時代情況のなかで楚国の歴史を振り返る動きがおこり、その動きの一つの例が「楚居」の編纂ではなかったらうかと推測している（小寺敦<sup>1</sup>）。小寺氏はまた、二〇一二年度歴史学研究会大会において「先秦時代系譜編纂の成立過程とその意義」という論題で口頭発表を行った際にも、「楚居」を関連資料として取り上げているが、祭祀対象としての祖先を確認するという意義から、支配者の正統性を示すものとしてのルーツを確認するという意義へ、系譜編纂の意義が変化していくというのがこの発表の主旨の一つであることからして、氏は後者の例の一つとして「楚居」をとらえているのであろう（小寺敦<sup>2</sup>）。

「楚居」の資料的性格に言及した研究は多いが、総じていえば一つの共通する認識が存在するように思う。それは、「楚居」は戦国楚国の内部に伝わり戦国楚国の人々に受容されていた伝承を、楚国の人々自身が整理して作成したものであるという認識である。より限定するならば、「楚居」は楚国以外の国で整理・編纂された史書・系譜の類から、楚国に関連する部分を抜き書きしたのではなく、楚国の人々自身が自己の伝承によって整理・編纂したものだという認識である。趙氏や浅野氏や小寺氏も、当然そう考えているはずである。この認識はおそらく正しいであら



う。ということは、「楚居」はまさしく純然たる「楚簡」ということになるのであり、同じ清華簡であつてもたとえは例の「繫年」が、その内容からして、楚国以外で整理・編纂された史書の抜き書きかも知れないという可能性をもっているのとは、その資料的由来において性格を異にしているといわねばならない。

「楚居」の資料的性格を云々するのは、おそらくこのあたりが限界であろうと思う。ただ、ここで止まつてしては、貴重な示唆を与えられた趙氏や浅野氏や小寺氏に申し訳なく思うのも確かであり、そこで、やはりつたないものはあるが私見を一つ提示しておきたい。「楚居」の資料的性格を云々する場合にもっとも重要なヒントとなるのは、「楚居」には周王朝との関連説話がまったく見られないという事実である。浅野氏も指摘するように、その代わりといふべきか、殷王・盤庚との姻戚説話が登場しており、それは周をはじめとする中原諸国への対抗心から、自己の正統性を強調するために、周王ならぬ殷王との姻戚説話を加上的に創作したのであろうというのが浅野氏の意見である。浅野氏のこの意見はきわめて貴重であり、氏がいち早くこのことに気づかれたのは卓見といつてよいであろう(浅野前掲論文)。この貴重な意見を、もう少し敷衍することはできないであろうか。

熊繹が周の成王から楚蛮の地に封ぜられ、子・男の資格を与えられたという伝承(『史記』「楚世家」)、同じく熊繹が斉の呂伋・衛の王孫牟・晋の夔父・魯の禽父とともに周の康王に仕えたという伝承(『左伝』「昭公十二年」)、あるいは熊麗が、越王繫虧が有邊から出て越に国を建て、晋の唐叔と斉の呂伋がそれぞれ斉・晋

に国を建てたのと同じように、睢山の間に封ぜられたという伝承(『墨子』「非攻下」)など、楚の祖先が周の封建に与つたという伝承がいくつか残存している。それらが「楚居」には一つ見えないのである。もっとも高崇文氏のように、季連から熊繹に至る祖先の居地京宗を鎬京Ⅱ宗周であると考えれば、周王朝と楚の祖先たちの関係が表示されていることになるが(高崇文前掲論文)、高氏の意見に簡単に従うわけにはいかないであろうし、よしんば従つたとしても、重要な祖先の一人として「楚居」が挙げている熊繹について、彼と周王朝の関連伝承を「楚居」自身はまったく伝えていないという事実には変わりはない。

楚の祖先たちが周の封建に与つたという伝承は、それが史実であるかどうかにかかわらず、いうまでもなく、中原世界に楚国の正統性を主張する重要な手段であつた。もちろん、楚王がその支配権の正統性を楚国国内に向けて誇示する場合にも有効な手段となりえたであろうが、しかし、第一義的にはやはり中原世界への正統性主張という場においてこそ、より大きな意味をもつたと考えねばならない。この正統性の主張という視点にたつとすると、『左伝』に見える次の二つの記述がどうしても浮かんでくるであろう。

・(楚の靈王が)、わが先王熊繹は、斉の呂伋・衛の王孫牟・晋の夔父・魯の禽父とともに周の康王に仕えたが、四国にはその証として周から賜与された宝器があるのに、ひとりわが楚国にはない。今、周に使いを遣つて鼎を宝器としてよこすよう要求させているが、周王ははたして鼎を与えるであろう

か？」といったのに対して、右尹子革は次のようにこたえた。もちろん王様に与えるでしょう。昔、わが先王熊繹は、荆山という辺鄙な山間に居り、柴草で作った粗末な車に乗り、ぼろぼろの衣を着て原野を開き、艱難辛苦して山川をめぐりわたり天子に仕えましたが、その仕事は、ただ桃の木で作った弓、茨で作った矢という粗末な武器でもって、王朝の軍事に参加するというだけのものでした。晋・魯・衛・斉の祖先は周王の弟です。ですから、楚国には賜与された宝器がなく、四国にはあるのです。しかし今や、四国も周自身も王様に服従していますから、なにごとくも王様の命令のままです。どうして鼎を惜しがることがありましようか。」と。(昭公十二年・意識)。

・(晋の欒武子は言った) 楚の国では、庸の戦役以後、その君主は毎日のように国人を訓令し、生活を保全することは生易しいことではなく、禍はいつやってくるかわからないものであるから、一時とも怠ってはならないと戒めております。また軍事についてもきびしく訓令し、勝利を維持することはきわめて困難で、殷の紂王は百戦百勝であったが、結局は滅亡して子孫がいなくなってしまうたではないか、と戒めています。そして、先王の若敖と蚡冒が柴草で作った粗末な車に乗り、ぼろぼろの衣を着て山林を開いた、その艱難辛苦をいっつも思い出して忘れるでないぞ、と訓戒をたれております。…(宣公十二年・意識)。

柴で作った云々」という一文の原文は、熊繹のそれについて

は「筭路藍縷、以處草莽、跋涉山川、以事天子」であり、若敖・蚡冒のそれについては「筭路藍縷、以啓山林」となっていて、多少の異同はあるものの「筭路藍縷」という表記の部分はまったく同じである。この「筭路藍縷」という表記は、創業の艱難辛苦を象徴的に表現したものととして後世の史書類にしばしば見えるようであるが、用例としてはこの『左伝』における楚国の二例がもっとも古いものであろう。

創業の艱難辛苦というのであるから、楚国においては熊繹と若敖・蚡冒の二組の祖先が、その表記を付与される、創業の業績をもった祖先として意識されていたことになるが、そのように意識される祖先は何も一人・一組に限るものではなく、複数存在してもおかしくはないはずであり、熊繹と若敖・蚡冒の二組がこの業績を付与されていても、別に不思議ではない。ただ、では「筭路藍縷」という表記がまったく同じであるように、まったく同じ創業の祖先としての意味合いをもつて、両者が楚国の人々に意識されていたかとなると、それはそうではない。なぜなら、『左伝』の二つの文章を読み比べれば一読瞭然なように、熊繹の業績は、楚国の正統性を周をはじめとする中原諸国に主張する場において回顧されているのに対して、若敖・蚡冒の業績は、楚国の人々が国家の維持と民生の保全をみずから意識しようとする場において、いわば楚国構成員の内在的な精神的紐帯として回顧されているからである。いかなれば、前者は国外向けの場において、後者は国内向けの場において、より強くその創業伝説としての意味を発揮していたことになろう。

このような事情を念頭に、今一度「楚居」を讀過していくと、周王朝との関連伝承が見えないばかりか、楚国の正統性を国外に主張しようとする場においてこそ、より強い意味をもったであろうと思われる伝承そのものが、ほとんど見られない。大半が、楚国の人々自身にとつてより強い意味をもったであろうと思われる伝承なのである。唯一の例外は、殷王・盤庚との姻戚説話であるが、これとても、はたして楚国の正統性を国外に主張する場において口説されたかどうかといえ、何ともいえないのではなからうか。

「楚居」に見られるもろもろの伝承は、したがって、国内向けの場においてより強く意味を發揮していた祖先伝承であると考えられる。これが、想定される「楚居」の資料的性格の一つであり、「楚居」に見えている伝承の多くが、『左伝』など、楚国以外の国で整理・編纂されたと思われる史書に見えていないのは、その伝承が楚国国内向けのものであったがため、国外で整理・編纂された史書に取り込まれる機会が、きわめて少なかったからではなからうか。

浅野氏の貴重な意見をどこまで敷衍できたかどうか、心もとないが、以上をもって「楚居」の資料的性格についての一つの私見としたいと思う。

## 二 「楚居」に見られる歴史地理的認識

字釈と文意についての三つの私見と、「楚居」の資料的性格についての一つの私見を提出した上で、さて次には本稿の本題である「楚居」に示されている、戦国楚国の人々の歴史地理的認識は楚国歴史地理研究の懸案問題にどのような影響をあたえるであろうか、という問題について私見を提出せねばならない。

まずはじめに、そのいくつかの懸案問題に対する、現在の自己の立場を表明しておく必要がある。楚国歴史地理の懸案問題とは、要するに西周時代の先王たちの居地丹陽と春秋戦国時代の都城郢都の位置を、どこに比定するかという問題に帰着するのであるが、目下のところの私案は次のとおりである。

第一、丹陽の位置については、陝西省東南部を東南流して漢水に流入する丹江の流域から、河南省西南部南陽地区・湖北省西北部漢水上流地区にかけての地域に存在したと想定する。

第二、郢都の位置については、春秋時代初めの武王時代から、前二七八年の秦軍による郢都陥落まで、およそ五百年間、ほぼ一貫して江陵紀南城遺跡であったと想定する。

第三、とすると、西周から春秋時代の初めにかけて、楚族はその拠点を北方の陝西省・河南省・湖北省交界地域から南方荊州地区に移動させたことになるが、その移動ルートは、湖北省西部の山間、荆山の東麓を南下するという路線であったと想定する。

はたして、「楚居」に見られる歴史地理的認識は、この私案の傍証になるであろうか、あるいは逆に反証になってしまふであろう

うか。この私案との関連を常に念頭におきつつ、以下に議論をすすめることにしよう。

(1) 季連・穴熊伝承から抽出される歴史地理的認識。

季連にまつわる伝承の中に登場している郢山・空窟・喬山・爰波・洲水・方山、穴熊にまつわる伝承の中に登場している哉水、そして季連・穴熊・熊惺の居地である京宗、これらの河川・山陵・原野・居地の位置については、異論がすこぶる多い。個々の意見を逐一紹介する余裕はないが、諸説における比定位置を並べてみると、ある一つの分類が可能ないように思われる。それは、これらの地名の多くを、河南省中部一帯におくか、湖北省西北部沮水・漳水上流・漢水南側の荆山山間一帯におくか、丹江流域を中心とする陝西省・河南省・湖北省交界地域の漢水北側におくか、意見はおよそ三つに分類されるということである。季連の降った郢山（驪山）を遠く青海高原に当てる劉彬徽氏の意見や（劉彬徽）、京宗を鎬京Ⅱ宗周にあてる高崇文氏の意見は（高崇文前掲論文）、この分類のいずれにもあてはまらない、極端な異論ということになる。

こういった分類が可能なのは、おそらく研究者それぞれがある前提となる定見をもっているためであって、その定見とは次のようなものであるにちがいない。すなわち、季連は祝融八姓（陸終六子）の末子であるとの伝説をもっており、祝融自身の故地が現在の河南省新鄭であるとされるのをはじめ、祝融八姓諸族の多くが河南省中部を中心に分布しているのであるから、楚族の本来の

故地は当然河南省中部一帯にあつたであろうとする定見、江漢・沮・漳は、楚の望なりといわれるように、江漢地区のなかでもとくに沮水と漳水が楚国にとって望祭の対象となる重要な河川であり、その上流に文献伝承にしばしば楚族の故郷と伝えられる荆山が存在するのであるから、楚族の本来の故地は当然荆山山間にあつたであろうとする定見、西周時代の楚族の居地丹陽を丹江流域にあつたとする武漢大学故石泉教授の学説は鉄案ともいべき整合的な意見であり、この石泉学説に従えば、楚族の本来の故地は当然丹江流域一帯にあつたであろうとする定見、この三つの定見である。もっとも、季連と穴熊に関連する地名のすべてをこの三地域のいずれかに限定してしまつては、論理上不具合が生じる場合も多く、そこである地名については河南省中部、ある地名については丹江流域とか、ある地名については丹江流域、ある地名については荆山山間とかいうように、いわば折衷案を提出している研究者も多いが、しかし、どの研究者も、三つの定見のいずれかを、程度の差こそあれ意見の大前提としていることは確かであろう。

この定見の並立状況をいまい少し詳細に整理してみれば、あるいは楚国歴史地理研究の懸案問題解決に何がしか寄与することがあるかも知れないが、本稿がもくろんでいるのはそのような方法ではなく、戦国楚国の人々の歴史地理的認識を抽出して、それを懸案問題解決の間接的ヒントにしようとする方法なのであるから、ともかく季連・穴熊にまつわる伝承の中から、歴史地理的認識を抽出しなければならない。季連・穴熊伝承から抽出しうるそのよ



うな認識とは、季連が洧水を遡って妣佳と結ばれたという伝説、穴熊が哉水を遡って妣戯と結ばれたという伝説に示されている、季連や穴熊の時代に、楚族はある河川を遡ってある種族と結合したという認識を置いて、他はないはずである。前節で述べた、季連がある河川を下って喬山に至った、という私見が正しい解釈であるとするならば、これも河川を利用して領域を切り開いたという認識とみることができようであろう。もう少し具体的にいうならば、楚族は本来、ある河川沿岸の要地を拠点とする一民族であり、それがある河川を上下して、他の沿岸要地を拠点とする種族と何らかの結合を果たしたという認識に他ならない。他の勢力との結合というこの事態は、いわば楚国形成のはじまりといつてよく、この認識が季連・穴熊伝承のなかに示されているということからしても、この両者は「楚居」の冒頭に登場する開国的祖先・定礎的祖先にふさわしいわけである。

戦国時代の楚国の人々は、おそらく、その洧水と哉水の位置を承知していたであろう。そして、その二水は戦国時代においても、ある程度の水運機能をはたしていたのではなからうか。むろん、洧水と哉水を確定することは、資料的に絶対不可能なのであるが、ただこのヒントを以下のようにさらに詳細化すると、いくつかの候補をあげることだけは可能かも知れない。

第一、『新蔡葛陵簡』には、江・漢・沮・漳・淮の五河川が見えているが（甲三二二六八）、それぞれの原字は洧水・哉水の原字とまったく異なっている。したがって、洧水・哉水はこれら五河川以外の河川であり、当然、長江・漢水より小さく、長江・漢

水の支流クラスあるいはその支流クラスで、ある程度の水運の可能な河川であったはずである。

第二、洧水を遡ると、妣佳という女性のいる勢力が存在していたことになるが、その妣佳は盤庚の子の女というのであるから、その勢力は殷文化を保有する勢力であった可能性がある。

第三、哉水を遡ると、妣戯という女性のいる勢力が存在していたことになるが、その妣戯は聶（聶）耳という特異な容貌をしていたというのであるから、その勢力は聶神崇拜といった特異な習俗をもっていた可能性がある。

この三つの条件にあてはまる河川を、ここでは西周時代の居地丹陽の位置をめぐる諸説から想定される各地域のなかを探していくことにしたいが、結果はどうであろうか。丹陽の位置についての諸説は、大きくわけて次の四説にまとめることができる。

・丹陽は丹江流域にあり、当初丹江上流の商州あたりにあったが、西周時代のある時点で下流の淅川あたりに移ったとみる説（丹淅説）。

・丹陽は当初淅川あたりにあり、西周時代のある時点で漢水を南にこえて荆山東麓に移ったとみる説（淅荆説）。

・丹陽は長江三峡の旧秭帰にあつたとみる説（秭帰説）。

・丹陽は荊州西南長江沿いの旧枝江にあつたとみる説（枝江説）。

丹淅説と淅荆説は北方説、秭帰説と枝江説は南方説ということができよう。この四つの学説と、先の三つの定見を並べてみると、丹陽＝丹淅説は、三定見のうちの石泉説そのものに相当し、丹陽

Ⅱ 浙荆説は石泉説と荆山山間説の折衷形態に相当することが容易に見て取れるし、河南省中部一帯という定見に直接相当する丹陽説はないものの、これは当然北方説の一意見に相当するとみてよいであろうから、結局、南方説に相当する定見はないことになる。言い換えれば、「楚居」季連・穴熊部分の地名考証を試みている研究者たちの眼中に、丹陽Ⅱ南方説はもはや存在していないといえるのであって、丹陽Ⅱ稀帰説・丹陽Ⅱ枝江説は、今日それほど劣勢なのである。したがって、以下の議論は、その劣勢さをより確かに確認することにもなることが、この時点ですでに予想されることになる。

丹陽と洳水・戡水がどれだけ離れていたか、その距離感はもちろん相対的なものではあるが、しかし、現在の河南省・陝西省・湖北省・湖南省全域という広い地理的範囲のなかで、丹陽と洳水・戡水の距離感とは常識的に決まってくるはずであり、洳水と戡水は河南省中部、丹陽は三峡といった極端な遠隔感はずから排除されることになる。

そこで、まず稀帰説に立って、三峡を中心とする地域の長江支流をとりあげてみると、南流して巫山峽城で長江に流入する巫溪水や、南流して旧稀帰峽城の東、香溪鎮で長江に流入する香溪水がその候補になるが、いずれも水運機能はごく小さいものであるし、二川の上流は文字通りの山岳地帯で、殷文化の痕跡や聶神崇拜をもった種族どころか、そもそも相応の勢力をもった集団が存在した痕跡が認められない。次に、枝江説に立って、付近を眺めてみると、沮水と漳水が当然候補として浮かんでくるであろう

が、これが洳水・戡水でないことは、先の第一の条件に明らかであるし、その他の河川のなかにも適当な候補を見つけることができない。殷文化の痕跡や聶神崇拜をもった種族についても、探索すれば行き当たるかと思うものの、そもそも洳水と戡水の候補が無いのであるから手の打ちようがない。

二つの南方説は、両者とも由来の古い伝統的な学説でありながら今は支持者がきわめて少ないのであるが、こうして予想通り、どのように地図を眺めてみても、該当する地域に「楚居」のこの洳水と戡水の候補を探し出すことができず、「楚居」の発現以降、南方説の支持者はよりますます減少しそうなのである。

とすれば、期待は二つの北方説にかかることになり、詳細に地図を眺めるまでもなく、該当する陝西省・河南省・湖北省交界一帯Ⅱ漢水上流地区には相応の河川が、確かに何本か存在する。漢水北側では、丹江はもとより、現在は老灌河と呼ばれている淅川、南陽を通る白河つまり古の清水、そして唐河、南流して漢水に流入するこれらの河川は、今もかなりの水運量を誇っており、往時の水運のありさまを偲ぶことができる。漢水南側では、竹山を通過して北流する堵河、房県あたりから東北流するいわゆる南河、そして蛮河、北流あるいは東流して漢水に流入するこれらの河川も、やはり今なおかなりの水運量を誇っており、往時の水運のありさまを偲ぶことができるであろう。

このように丹陽Ⅱ北方説に該当する地域のなかには、第一の条件にかなう洳水と戡水の候補をあげるとなると、ではこの地域が第二・第三の条件にかなうかどうかだが当然問題になってくるが、

これについてもどうやら目途らしきものが付きそうである。第二の条件については、他ならぬ高崇文氏の指摘が重要な参考になる。高氏は、長江流域青銅器文化の形成を論じた研究のなかで、殷文化が四川方面に伝わった基本ルートは、河南省西部から漢中盆地を経由して四川盆地に南下するルートであったと想定しているのである（高崇文）。近年話題を呼んでいる漢中地区城固県・洋県の殷代青銅器文化は、そのルート上に栄えたいくつかの殷代青銅器文化の一つに他ならないであろう（趙叢蒼）。すなわち、今問題としている漢水北側・漢水南側の数本の河川は、その基本ルートと交差するように南北方向に流れているのであって、その流域にかつて殷文化をもった勢力が存在していた可能性がきわめて高いのである。ちなみに、『水経注』「丹水注」は、又東南過商県、又東南至於丹水県、入於均の条において、

皇甫謐と鬪駟は、ともに、上洛の商県であり、殷商という名称はここからはじまったのである」としている。

という興味深い記事を載せている。殷・商の商という名称が商県の商に由来するというのは、もちろん史実ではなく、単なる異伝であろうが、しかしこのような異伝が生じた背景には、丹江流域商県一帯にかつて殷文化が存在し、それが後世にまで記憶として残っていたという史実があるのかも知れない。

第三の条件については、黄鳴氏の貴重な指摘に注意しなければならぬ。穴熊と結ばれた妣戯の容貌を、「楚居」は「聶」耳と記しているのであるが、〈注釈〉はこれについて『山海経』「海外北経」の「聶耳之国、…為人兩手聶其耳」という記事を引いて

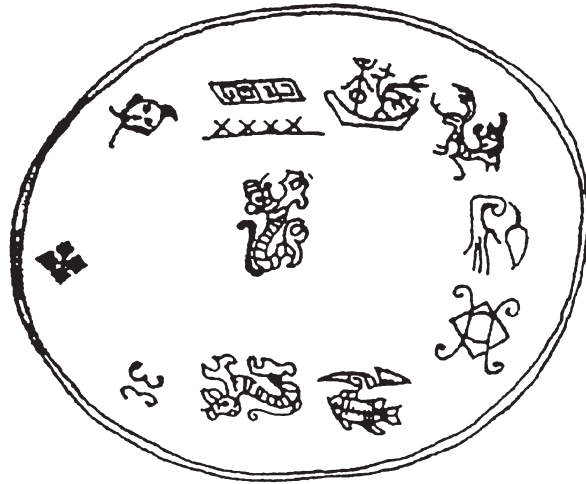
いる。この聶耳之国を具体的に探索したのが黄氏であり、黄氏は、<sup>30</sup>という徽号の刻まれた殷代から西周はじめごろにかけての青銅器図案を多数とりあげて、この青銅器をもつ種族こそが「楚居」にいう妣戯の一族であると断定し、その位置はそれら青銅器の出土地点からして、河南省北部輝県一帯であろうと想定しているのである（黄鳴・図は黄氏が冒頭にあげている『殷周金文集成一四六二』の図版）。



黄氏のこの指摘は、楚族の本来の故地を河南省中部一帯にあてての学説にとつて強力な援軍となるであろう。

ただ、『山海経』にいう聶耳之国かどうかはともかくとして、聶神崇拜をもっていた可能性のある勢力ということになれば、それにあてはめられそうなのは、黄氏のいう輝県一帯の勢力が唯一ではない。たとえば、例の三星堆の青銅仮面の耳も、周知のようにに並はずれた大耳であつて、三星堆の勢力が聶神崇拜をもつてい

た可能性は皆無とはいえないのである。そこで、この皆無とはいえない可能性を追求していくと、ともすれば見落としがちな、重要な青銅器図案が浮上してくることに気づくことになる。



これは巴族の独有器にして、巴族青銅器の中でも珍品中の珍品である虎鈕錙子の盤部に刻まれた図案である。虎鈕錙子とは、錙子という青銅樂器のうち、これを吊るす鈕（つまみの部分）が虎の形状をしているものをいうのであり、湖北省西部・湖南省西北部・重慶地区などの巴族居住区のみには見えないことと、巴族が虎神崇拜をもっていたことから、巴族の独有器と考えられている。

この虎鈕という特異な形状だけでも特異さは十分際立っていると  
思うが、虎鈕の立つ盤部に奇妙な図案が刻まれているのもまた特  
異で、ここに掲げたのは、そのなかでももっとも図案数の多い、  
万県出土と伝えられる四川大学博物館所蔵虎鈕錙子のそれに他な  
らない（李純一『中国上古出土樂器綜論』一九九六年・文物出版  
社・図二一八—一）。目をこらして見るまでもなく、双耳図案が  
確かに存在している。虎鈕錙子の盤部図案は、おそらく巴族を構  
成する各種族それぞれの崇拜神を象徴していると考えてよいであ  
ろうから、ここに巴族のなかのある種族が聶神崇拜をもっていた  
可能性が生じてくることになる。

虎鈕錙子の分布地域は湖北省西部・湖南省西北部・重慶地区で  
あり、第一の条件にかなう陝西省・河南省・湖北省交界＝漢水上  
流地区とはかなり離れているし、また虎鈕錙子は戦国時代以降の  
巴族青銅器であり、殷代とか西周時代における聶神崇拜種族の存  
在を直接証拠づける手段とはならないという反論が聞こえてきそ  
うであるが、ところが巴族の本来の故地は、のちの居住地域であ  
る湖北省西部・湖南省西北部・重慶地区ではなく、実は漢水上流  
地区であったという学説が、今日有力になりつつあるのである。  
この学説に従うとすると、巴族は漢水上流地区から長江上流地域  
に南下したことになる、その一種族である聶神崇拜種族も同様に  
南下し、後世の巴族青銅器に双耳図案を残したのだと考えてもお  
かしくはない。殷・西周時代の漢水上流地区に、聶神崇拜をもつ  
た勢力が存在していた可能性は、決して皆無ではないと思われる  
が、どうであろうか。



陝西省・河南省・湖北省交界Ⅱ漢水上流地区における殷文化勢力の様相と巴系諸族の有無については、しかるべき詳細な議論を實行する必要があるが、それは後日を期することとして、当該地域の河川は第二・第三の条件にもかないうる可能性があることを、ここに確認しておきたいと思う。

以上の議論に大きな誤りがないとすれば、戦国時代の楚国人々は、季連・妣佳的の洲水と穴熊・妣麇の哉水について、陝西省・河南省・湖北省交界Ⅱ漢水上流地区のある河川を思い浮かべていたことになる。これは、楚国歴史地理研究の懸案問題の解決、ことに丹陽位置問題の解決にあって、きわめて重要な認識といえるであろう。季連・穴熊伝承にまつわる一連の地名の位置について、多くの研究者がそれらのほとんどを、丹陽Ⅱ南方説に相当する地域をまったく無視して、丹陽Ⅱ北方説に相当するこの地域、及び東方やや近隣の河南省中部一帯に求めているのは、その結果において誤っていないことが、かなりの程度証明されたといわねばならない。

## (2) 熊繹伝承から抽出される歴史地理的認識。

戦国楚国の人々にとって、熊繹もまたその業績上、記憶に残すべき特別な祖先の一人と意識されていたらしく、少ないながらも伝承が残されている。今までの居地京宗から麇屯という居地へ移動したこと、校室とよばれる宗教施設を造って「柰」とよばれる重要な宗教儀式を創設したことが、その内容である。歴史地理的認識ということになれば、麇屯へ移動する可否を「都」の

隘という人物に卜占させたという記事、校室での宗教儀式に不可欠な「犮」がなかったがため、「都人」のそれを盗んできて祭った、という記事の双方にみえている都の位置が問題となろう。(注釈)もいうように、都の位置は麇屯の位置と近隣であったと考えられ、戦国楚国の人々もそれを十分認識していたに違いないからである。楚国の人々はこの都の位置を十分承知していたと思うが、周知のように、都の比定位置については、丹江流域のいわゆる商密説と漢水中流宣城県付近のいわゆる南郡都県説が対立しており、異論決しがたい状況にある。熊繹にまつわる伝承をいくらか眺めていても、楚国の人々がどちらと考えていたか、ヒントすらえられない。そこで、この問題は熊繹以外の祖先についての伝承のなかにヒントを探さざるをえないのであるが、次にあげる宵敖熊鹿の居地についての伝承は、どうやら一つのヒントを提供してくれそうであり、したがって宵暮の居地伝承に関連づけて議論を展開することにしようと思う。

熊繹が麇屯に移動して以降、五人の祖先がこの麇屯に居住し、ついで熊迨が発漸に移動して、以降二人の祖先がこの発漸に居住し、ついで熊塾が旁岍に移動し、ついで熊緡が旁岍から喬多に移動して、以降七人の祖先がこの喬多に居住し、ついで若敖熊養が都に移動し、ついで樊冒熊帥が都から樊に移住し、ついで宵敖熊鹿が樊から宵に移住した、という祖先名と居地の変遷を、熊繹以下の記事はたんたんとして伝えるのみである。(注釈)は、麇屯こそが既存文献伝承にいう丹陽であろうといっているが、では他の居地への移動にともなって丹陽という地名も移動していったの

か、そうではなく丹陽は麇屯のみで、他の居地は別の地名でもつてよばれたのか、〈注釈〉にも他の研究者の意見にもはつきりした主張はない。各居地の位置を比定する手段ももちろんなく、もどかしいかぎりであるが、ただ一つ宵敖熊鹿の居地宵についてだけは、以下の通り、幸いにもなんとかその位置を決定できそうなのである。

### (3) 宵の比定位置とそれが楚国歴史地理懸案問題に与える影響。

宵敖が移住したという宵はどこであろうか。これももちろん「楚居」の記事自身のなかには、その探索手段はないのであるが、実は一つの有力な意見がある。それは、秦漢の簡牘資料にみえる南郡の「銷」にあてる黄錫全氏や趙平安氏の説である（黄錫全・趙平安<sup>2</sup>）。具体的には、例の里耶秦簡・里程簡にみえる銷がそれであり、多くの研究者は襄陽と荊州のちようど中間点あたり、現在の荊門市の北、子陵鋪・石橋鎮一带にその位置を求めている。「楚居」所見地名の位置については、そのほとんどが異論決しがたい情況のなかにあつて、ただこの宵＝銷という意見だけは異論がみあたらない。宵敖の居地になったほどの城邑であるから、そのまま秦漢時代の県城になった可能性は高いし、そしてなによりも宵と銷の字形の近似が、異論の出現を封じ込めているのであろう。先秦の地名位置を秦漢の資料で探索する場合に必ず生じる、時代差による資料上の不安定さは免れないものの、行論の都合上、何か一つは前提として設定することを許されてよいであろうという判断のもとに、宵は銷であり、それは現在の子陵鋪・石橋鎮であ

るといふこの意見を、その何か一つの前提として設定することにしたいと思う。このように宵敖の居地宵は銷であるという前提に立つとすると、次の三つの楚国歴史地理の問題に、大きな影響をあたえることになるはずである。

第一は、熊繹伝承にみえる、先述の都の位置比定に与える影響である。上に整理したように、熊繹以降十七人の祖先が五回にわたつて居地を移動させながら、宵敖に至つて宵に移動してきたというのであるから、熊繹以降宵敖に至るまでの間、相当に長い歳月をかけて、相当に長い距離を移動してきたと考えねばならないであろう。熊繹時代の都がもし南郡・都県の都であつたと想定すると、宵＝銷との直線距離はおよそ五十キロメートル、十七人の祖先が五回の移動をへて到達した距離としては、あまりにも短かすぎる。南郡・都県説には従いがたいのである。となると、二者択一的に、都は丹江流域の商密であつたという学説が浮かび上がってくるが、丹江流域と宵＝銷の直線距離およそ二百五十キロメートルは、十七人の祖先が五回の移動をへた距離としてふさわしいといわねばならない。戦国楚国の人々が承知していた熊繹時代の都は丹江流域商密の都であつたとの意見を、ここに提出したいと思うのである。

ただそうすると、きわめて大きな問題が生じる。それは、では宵敖の二代前の若敖の都はどこであろうか、という大問題である。実は、ここまでは都という字体で統一してきたが、「楚居」にはこの字に該当する字は複数回登場しており、整理者の字積は次の通りである。

- 1 熊繹伝承の占卜記事における若
- 2 熊繹伝承の窃盜記事における若
- 3 若敖の名号における若
- 4 若敖の居地記事における箸
- 5 壘敖の居地記事における箸

整理者が〈注釈〉ですでに1・2のそれを都と書き変えているように、整理者も他の研究者もそして本稿も、これらはすべて既存文献伝承にみえる都であることを前提として、統一して都という字体を使用してきたのであるが、これは厳密には正しくはない。どの字にも邑（おおざと）がついていないというのは、しばしばみられる表記上の例であるから、それはよいとしても、1には艸も竹もついておらず、2には艸がついており、3には艸も竹もついておらず、4と5には竹がついているというのは、いかにも不可思議だからである。同じ文書のなかで、同一の地名字に対して、ある場所では何もつけず、ある場所では艸をつけ、ある場所では竹をつけるということがありうるであろうか。出土文字資料には確かにその例があるようであるが、だからといってこの場合もすべて同一字であると決めつけるわけにはいかないはずである。この場合はこの場合で、何らかの推測を試みなければならぬのであり、たとえば次のような事情を推測することができようであろう。

- ・若敖は箸を居地としたことよって若敖と呼ばれたのであるから、3の若と4の箸は同一地点の地名であるはずである。
- ・右例ほどの確率ではないにしても、同じ熊繹伝承のなかに登場している若と若が異なった地点であると考えにくい

ら、1の若と2の若も同一地点の地名である可能性は高いであろう。（ちなみに〈注釈〉は、これが姓氏として使用される場合は艸も竹もつけずに若、これが居地の地名として使用される場合は艸もしくは竹をつけたのであろうと推測している）。

- ・そうすると、違いは熊繹伝承の若には艸がついているのに対して、若敖伝承及び壘敖伝承の箸には竹がついている点にあることになり、これは熊繹時代の若と若敖・壘敖時代の箸が、異なった地点であることを示しているのかも知れない。

このような推測をあえて提出してみたのは、実は他ならぬ高崇文氏が、熊繹時代・若敖時代・壘敖時代の、それぞれの若・箸・箸は名は同じでも地点は異なるとの意見を提出しているからである（高氏前掲論文）。若敖時代の箸と壘敖時代の箸は、同じ竹がついている以上、両者を同名異地ととらえるのは、いかがかと思うが、熊繹時代の若と若敖時代の箸を同名異地ととらえるのは、艸と竹の違いにはつきりと対応することになろう。

右に説明した字体上の違いを念頭においた上で、ふたたび都という字を統一して用いることとして、熊繹時代の都は丹江流域の商密であるという立場に立った上で、その都と若敖時代の都は異なった地点であるとの推測に従うならば、若敖時代の都は南郡の都であろうとの想定が当然出てこなければならぬ。

若敖・都（南郡・都）↓焚冒・焚↓宵敖・宵（銷）  
 という三代間の移動距離として、南郡・都県と宵Ⅱ銷との直線距離およそ五十キロメートルは、まずは常識的なものあるといつて

よいであろうし、そしてこのことは、焚冒の焚もおそらくこの五十キロメートル圏内にあったとの想定をもたらすことになるう。

ただもちろん一方で、これらの都はすべて同一地点であるとの推測も当然可能であり、この推測に従っている研究者も多いであろう。そうすると熊繹時代の都は丹江流域の商密であるという立場に立つ以上、若鬻時代の都も同じ商密ということになり、

若敖・都（丹江流域・商密）↓焚冒・焚↓宵敖・宵（銷）  
という三代間の移動距離は直線でおよそ二五〇キロメートル、かなりの遠隔ではあるが、他の先秦諸国の遷都距離を考えればまったく不可能という数字ではない。この理解であっても、決定的な支障はなさそうなのである。

若敖の都はどこであろうかという大問題については、このように五ヶ所みる都の位置を、同名異地とみるか同名同地とみるかによって、南郡・都県の都かあるいは丹江流域商密の都かという二つの意見が想定されてくることになる。宵Ⅱ銷との距離を考慮すれば、前者がベターではあるものの、後者でも絶対不可能というわけではなく、結果としては、結局異論決しがたいことになってしまふであろう。熊繹時代の都は丹江流域の商密である可能性がきわめて高い、という私見を提示しただけでも十分よしとして、今一つの若敖時代の都はどこかという、この大問題をこれ以上詮索することはいったん休止したいと思う。

なお、陳朝霞氏の近作は、この都とそれに関連する地名の位置について、きわめて精密な議論を展開している。内容を紹介する

余裕はないが、本稿の議論を補うものとして是非参照されるようお願いしたい（陳朝霞）。

第二は、『史記』「楚世家」が伝える熊渠三子伝承の解釈に与える影響である。熊渠三子伝承とは次のようなものである。

熊渠には三人の子があつた。周の夷王の時であつたが、王室の力は弱くなり、諸侯のなかには王室に朝さないものも多く、互いに戦いあつていた。熊渠は、江漢地区の人々の状況を十分に安定させて、その勢いでもって軍隊を興して庸と揚粵を伐ち、鄂にまで到つた。熊渠は「我々は蛮夷であるから、中国の号諡の制度を守る必要はない」といって、ついに長子の康を句亶王に封じ、中子の紅を鄂王に封じ、少子執疵を越章王に封じた。その封地はいずれも「江上楚蛮之地」である。ところが周の厲王の時になると、厲王はきわめて暴虐で戦争好きであり、熊渠は周が楚を伐ちにくることを恐れて、三子の王号を撤廃した。（『史記』「楚世家」・意識）。

三子の封地のうち、句亶の位置についての「集解」・「索隱」の意見は江陵、つまり今の荊州、鄂の位置についての「集解」・「正義」の意見は武昌、つまり今の武漢付近、越章の位置については決まった注記はないが、長江中流域から下流域にかけての地域とみるのが伝統的・一般的な理解である。つまり、三地とも長江本流流域であるというのが、各種注解の意見ということができよう。

さて、熊渠は『史記』「楚世家」の系譜では、宵敖から世代で六代前、先王人数で十二人前、「楚居」の系譜では、世代では七代前、先王人数で十一人前の人物である。北方から南下してきた



楚族が、宵敖の時にようやく宵<sub>II</sub>銷に到達したとなると、それより六・七代前、十一・十二人前の先王の時代に、その三子が宵からはるか南方の、長江本流域の各地に封じられたということがありうるであろうか。常識的に考えて、ありえないといわねばならぬ。

この疑問に対する解答は二つあるはずである。一つは、この三子封王伝承の史実性は疑わない上で、「集解」・「索隱」・「正義」の解釈を疑って、句亶・鄂・越章の位置をもっと北方に引き上げて比定するという解答である。具体的にいうならば、この三地を正しくは宵<sub>II</sub>銷の北方、少なくとも宵<sub>II</sub>銷一带付近を南限としてあてようとする解答である。実は、楚国の歴史地理研究においては、「楚居」発現以前から、たとえば鄂の位置を武漢付近ではなく、漢水中流から上流の地域に比定しようとする意見が少なからずあり、「楚居」の発現によって武漢付近説が破綻した今、句亶・越章の位置もふくめて、この意見はより勢いづくことになる。

今一つは、この三子封王伝承の史実性を、そもそも疑うという解答である。すなわち、この伝承は、後世の楚国の政治・外交状況を反映して、いわば加上的に偽造された史実ならざる架空の伝説であって、これが後世あたかも史実のように信じられることになったのだとみる解答である。その後世の政治・外交状況としては、当然同じ「楚世家」の次の記事が想起されるであろう。

（楚武王の）三十五年、楚は随を伐った。随は、何の罪もない我々をどうして攻撃するのか、といった。これに対して楚は次のようにいった。我々は蛮夷である。今、諸侯はみな

たがいに侵略しあい、たがいに殺し合い、情況は大いに混乱している。我々にはひとかどの軍隊がある。これでもって中国の政治をみてやろうと思う。ついては、周の王室に頼んで、我々にもっと高い称号をもらってほしいのだ」と。そこで、随の人は周の都に行き、その称号をもっと高くしてくれるよう頼んだが、周王は許さなかった。帰って楚に報告したところ、熊通は、吾が祖先鬻熊は周の文王の先生であったが、おしくも早死にした。そこで周の成王は我らの先王を抜擢して、子・男の資格でもってこの楚の地に封じ、それによって蛮夷はみな服従することになったのだ。なのに今周が我々の称号を高くしないというなら、我々としては勝手に高くするまでのことだ」といって、自ら立って武王となった。（『史記』「楚世家」・意訳）。

武王の称王という重要な事件を契機として、あるいはそれを受けた楚国の中原進出という過程において、熊渠三子封王伝説が作られた可能性は棄てきれないであろう。その伝説がいつしか史実として信じられるようになるとともに、長江本流地域にも広まり、伝説のなかの句亶や鄂や越章は長江本流に存在したとの認識が生まれ、それが「集解」・「索隱」・「正義」に採用された可能性が棄てきれないのである。この熊渠三子伝承の資料的性格については、鄭威氏にきわめて示唆に富む研究があり、詳細を紹介する余裕はないが、是非参照されるようお願いしたい（鄭威）。

既存文献伝承、とりわけ西周時代及びそれ以前の時代に相当する伝承にみえる歴史地理問題を扱う場合、その伝承が史実かどうか

かを十分吟味しなければならぬのは当然であるが、宵囂の宵は銷であるという理解に立つと、熊渠三子封王伝承について、あらためてその資料吟味の必要性を痛感させられるのであり、そこにこの理解の重要な意味があるのである。二つの解答のどちらが正しいのか、これもまた異論決しがたい問題であろうから、その詮索はひかえることとして、ここではその重要な意味を指摘して、注意うながすだけにとどめておくことにしたい。

第三は、郢都の位置問題をめぐる論戦に与える大きな影響である。「楚居」の記事は、宵囂の次の武王に至って郢の都に奠都したことを明記しており、郢の創建は武王時代か文王時代かという長年の懸案問題に、ほとんど決定的な決着がつけられたことになる。さてではその郢の位置であるが、これまで次のような学説が対立し続けてきていた。

・春秋時代の初め武王時代から、戦国晩期紀元前二七八年の秦軍による郢の陥落まで、ほぼ一貫して江陵紀南城であった(紀南城説)。

・春秋時代の初め武王時代から、春秋時代を通じて宜城楚皇城であり、春秋から戦国に入るころに江陵紀南城に移り、そのまま紀元前二七八年まで紀南城であった(楚皇城↓紀南城説)。

・春秋時代初め武王時代から、戦国晩期紀元前二七八年の秦軍による郢の陥落まで、一貫して宜城楚皇城であった(楚皇城説―武漢大学故石泉教授の学説)。

これ以外の学説も存在するが、大要ということであれば、いずれ

もこの三説のいずれかに含まれることになる。

ここまでの議論にすでに明らかのように、楚族は陝西省・河南省・湖北省交界一帯に漢水上流地区から、しだいしだいに南下して、宵敖の時に宵に銷、つまり現在の子陵鋪・石橋鎮あたりに到達し、そして春秋時代に入って武王の時に郢の都に到達したと、戦国楚国の人々は認識していたわけである。したがって常識的に考えれば、郢の位置は宵に銷の南でなくてはならない。宜城楚皇城は子陵鋪・石橋鎮の北およそ五十キロメートルであって、つまり宵に銷はすでに楚皇城を南へ越えており、とすれば楚皇城が武王の郢であった可能性は、限りなく小さいことになる。楚皇城↓紀南城説、つまり石泉説が、これによって大きく揺らいだことを認めざるをえない。楚国歴史地理の懸案問題に、「楚居」の内容が与えるもつとも大きな意義はここに存在するのであり、個人的な私情を披瀝するとするならば、「楚居」を読んでここに到った時、思わず拍案絶叫したくなるほどであった。

もつとも、これでもって紀南城説が唯一の正解として立ち上がったわけではない。武王の郢の位置は宵に銷の南方であろう、という条件が与えられたことは確かであるが、だからといって、紀南城がそれであるという証拠が得られたわけではまったくないのである。目下のところ、現鍾祥県郢中鎮の故郢州城にあたる黄錫全氏の意見(黄錫全)、沮水・漳水合流点付近の蔡橋遺跡にあたる王紅星氏の意見(王紅星)、そして紀南城にあたる程少軒氏の意見(程少軒)などが並び立っており、この郢の位置については、今後あらためて白熱した議論が展開されることになろう。

## (4) 盍廬内郢(闔廬入郢)の郢とはどこだろうか。

春秋晩期の楚昭王時代に、呉の軍隊が郢に侵入し一時占拠されたというのは、『左伝』などが伝える史上有名な事件であるが、「楚居」もわずか四字の短文ではあるものの、これを伝えていいる。「楚居」を一覧すれば明らかのように、文王以降最後尾の鄒折王(悼王)に至るまでの記事は、ただ王名と居地名だけを記すだけかほとんどで、何かの伝承らしき記事はごくわずかしか見えないのであるが、そのような情況のなかで、楚国にとっては不名誉といわざるをえない呉師入郢事件が明記されているのであるから、楚国の人々にとってこの事件は、名誉・不名誉にかかわらずどうしても記録にとどめておかねばならない大事件であったのであろう。

※石川三佐男氏は、その近作のなかで、この呉楚戦争から生じた教訓が、『楚辞』諸篇成立の一つの重要な思想的動機となっていることを論じており、そのような視点に立って「楚居」の資料的性格を論じるべきであることを示唆している(石川三佐男)。

ところがこの郢がいったいどこであったのか、皆目見当がつかない。より正確にいうならば、多数登場している某郢と称される諸郢のうちのどれであったのか、いやそれ以外の某郢とは称されない、ただ郢とのみ称される郢であったのか、皆目見当がつかないのである。

『望山簡』以降、今日に至るまでに発現した戦国楚簡には、某郢と表記される楚王の居地が多数みえている。某郢の某とは地名であり、郢とは楚王の居地であるが、それぞれの理由ははっきりし

ないものの、楚王はしばしば遷徙をくりかえしており、竹簡記事の書かれた時点で楚王の居地を相互に区別するため、その時点での居地にとくに某という地名を付けたものであることは容易に想像できる。したがって、歴代楚王の遷徙の回数分だけ某郢が存在したことになるが、「楚居」には実に十四ヶ所の某郢が登場しているものであり、春秋戦国の楚王が思いもよらないほどひんぱんに遷徙を繰り返していたことが、今回はじめて明らかになったのである。

ところが、どうしたわけか、闔廬入郢の部分だけはただ郢とのみ記されて、某郢とは記されていない。なにせ不名誉ながら記録に残さざるをえない大事件なのであるから、戦国楚国の人々は、この郢がどこであるのか当然十分に承知していたであらう。それが、この郢に某がついていないために、この郢の位置についての楚国の人々の認識を明らかにすることができないのは、まことに残念である。

現時点でもっとも有力な意見は、これを「為郢」とみて、何かの理由で「為」が省略されたにすぎないと考える張碩・肖洋氏などの意見であろう(張碩・肖洋)。為郢は文王の時代に楚王の居地の一つとなって以降、穆王・莊王が一期に遷徙したのち、共王・康王・孿子王(郟敖)の三代が一貫してここを居地とし、昭王もここを一時的な居地に定めている。つまり、楚王が遷移して居住した総期間ということになれば、某郢のなかでも淋郢とやらんでもっとも長いのであり、他の某郢からは抜kindでた、とりわけ重要な城邑として、その重要さゆえ時として為郢の為を省

略して呼ぶことがあったとしても、何の不思議もないであろう。それになによりも「楚居」は、𠄎鄂遷居𠄎袁為鄂、𠄎孟虜内鄂𠄎と、為鄂への遷徙記事にすぐ続けて闔廬入鄂記事を挿入しているのであるから、鄂が為鄂であるというのは、ごく自然な解釈ということができるのである。

しかしながら、確かに蓋然性の高い意見ではあるけれども、ただそれはあくまで蓋然性の程度之差であって、この意見が唯一絶対というわけではないであろう。少ないながらもこれとは異なった意見が出されているところに、その唯一絶対でないことが示されているはずである。本稿がこの問題を取り上げたのも、もとより為鄂説とは異なった意見の提出をもくろんでいるためであり、したがって以下に一つの私見を提示してみなければならぬ。

この問題を考えるヒントはおそらく次の三つであろう。

第一は、『新蔡葛陵簡』や『包山簡』には、𠄎某鄂𠄎と、𠄎鄂𠄎の双方がみえているという問題である。すなわち『新蔡葛陵簡』では、多数見えている、𠄎王徙於鄢郢之歳𠄎（王が鄢郢に移った歳）の鄢郢、いくつか見えている、𠄎王復於藍郢之歳𠄎（王が藍郢にもどった歳）の藍郢、𠄎王自肥遺郢徙於鄢郢之歳𠄎（王が肥遺郢より鄢郢に移った歳・甲三・二四〇）の肥遺郢とともに、𠄎才郢𠄎（郢に滞在する乙四・三五）及び、𠄎居郢𠄎（郢に居る乙四・八五）という、鄂とのみ単称する例が見えており、『包山簡』では、𠄎王廷於藍郢之游宮𠄎（王が藍郢の游宮に出遊する乙七）の藍郢、𠄎致胙於臧郢之歳𠄎（胙を臧郢に献上してきた歳乙一二）の臧郢、及びいわゆる所詔簡にしばしば見えている、𠄎鄢郢・𠄎榔郢𠄎とともに、𠄎逾於郢𠄎。

（船で郢に下る乙一〇二背）という、鄂とのみ単称する例が見えているのである。これは、『新蔡葛陵簡』や『包山簡』が書かれた当時、某鄂とは呼ばれずに、𠄎鄂𠄎と単称される鄂があったことを明示しており、当時の楚国の人々にとっては、その鄂がどこであるか、説明するまでもなくもちろん自明であったはずである。とするならば、闔廬入鄂事件の当時においても、某鄂とは呼ばれずに、𠄎鄂𠄎と単称される鄂があり、当時の人々はもちろん、「楚居」が書かれた戦国楚国の人々にとっても、その鄂がどこであるか、もとより自明であったと想定しても、何ら不思議ではないであろう。

第二は、文王以降、歴代の楚王は十箇所以上の某鄂を転々と遷り渡っていくのであるが、この間、武王が建設してはじめて、𠄎鄂𠄎とよばれることになった鄂はどうなっていたのであろうか、という問題である。

「楚居」は、𠄎武王が到達した免の地は居住可能範囲がせまくて人々を収容することが不可能であり、そこで「疆涅之波（坡）」を埋め立てて広い居住範囲を確保し、人々を収容した。そこから楚王と人々が住むこの居住地を、𠄎鄂𠄎と呼ぶようになり、その呼び名は現在に至るまで続いていると記している。武王が最初に到達した免の地、つまり免鄂と、その後新たに創建した疆郢の地がいっただいという位置関係にあったのか、この記事だけからはもちろん不明である。ただ、「楚居」はこの記事に続けて、

至文王、自疆郢遷居淋郢、淋郢遷居夔郢、夔郢遷居為郢、為郢遷居免郢、女改名之曰福丘。



と記しており、この記事が文字通りに読めば、その位置関係が推測できるように思われる。この記事の文意が、武王は疆郢に居住していたが、武王が死んで文王が即位すると、その疆郢から瀝郢に遷り、次に夔郢に遷り、次に爲郢に遷り、そしてさらに免郢に遷った<sup>2</sup> というものであることは間違いないが、注意しなければならないのは、その免郢への遷徙が「復」と記されていることである。この「復」は「楚居」の他の箇所にもいくつか見えており、以前かつて居住していた居地に再び遷移してきたという意味であることは明らかである――先に引用した『新蔡葛陵簡』の「王復於藍郢之歳」という記事が想起されよう。すなわち、文王はかつて免郢を居地としていたのであり、三ヶ所の某郢を経て、再び免郢に遷ってきたわけである。文王が以前免郢を居地としていたとはどこにも記されていないけれども、しかし、父武王は免郢の側に疆郢と造成し、その子文王は即位当初その疆郢に居たのであるから、文王の復帰したこの免郢が、とりもなおさず疆郢であることは、自ずから明らかであろう。そうでなければ、「復」という表記が理解できないはずである。

思うに、免郢と疆郢の関係は、内城と外郭、東城と西城といったような、同一の城邑のある部分を免郢と呼び、ある部分を疆郢と呼ぶ関係であったのかも知れない。より推測をたくましくするならば、文王は即位当初疆郢の部分に居住しており、三ヶ所の某郢を経て再び遷ってきた際には、疆郢の部分ではなく免郢の部分に居住したのかも知れない。

免郢と疆郢の関係をこのように解釈するとして、武王によるこ

の免郢と疆郢からなる城邑の建造、つまり郢の建造は、その建造工事が「楚居」に伝えられるほどの、楚国史上画期をなす一大城邑の建造であったと考えられる。免郢部分だけでは入りきらず、疆郢の建造が必要となったのであるから、その住民の大量さが想像できよう。そして、王号を称したのは武王が最初であること、「郢」を冠せられたのはこの城邑が最初であることを考慮すれば、その建造は要するに、宗廟・社稷などの祭祀組織と官衙市里などの都市機能を備えた本格的都城の、楚国における最初の建造であったと想定されよう。したがって、文王以降、歴代諸王は何回も某郢を遷り渡っていくのであるが、しかし、それはこの武王建造の大都城が廃棄されたことを意味するのではもちろんなく、祭祀機能・都市機能が減退していったことを意味するわけでもないであろう。逆にいえば、ひんぱんといってよいほどの頻度で繰り返された某郢への遷移は、おそらく何らかの理由による楚王の本営の一時的移動であって、祭祀機能・都市機能全体の移動をとんでもないのではなく、そういった某郢への遷移にかかわりなく、祭祀機能・都市機能などの本来の都城機能は、依然として武王創建の郢がない続けていたとみなければならぬ。某郢への遷移は、本来都城の転移をとんでもないものではないと考えない限り、その遷移のひんぱんさが、どうにも理解できないのである。

第三は、闔廬入郢という大事件を『左伝』がどのように伝えているかという問題である。関連する記事を並べてみると次のようになる。

前五五九年 楚の子囊は呉軍との戦いから帰り、ほどなく亡く

なつたが、子庚に向つて、郢に城壁を築き、呉軍の侵攻に備えよ」と遺言した(襄公十四年・要約)。子囊の孫子常が令尹となり、郢に城壁を築いた(昭公二十三年・要約)。

前五〇六年 十一月庚午の日に、呉・楚は柏挙で対峙し、戦闘の結果、楚軍が敗北した。その後、五回の戦闘をへて、呉軍はついに郢に到達した。己卯の日に、楚の昭王は妹とともに出奔した。庚申の日に、呉軍が郢に入った(定公四年・要約)。

前五〇五年 楚は秦の援軍をえて呉を撃退し、呉軍は郢から撤退した。昭王は郢に入った(定公五年・要約)。

前五〇四年 呉の太子が楚の水軍を破り、楚の將軍たちを捕虜にした。楚国の人々は大い恐れて、国が滅びるのではないかと恐怖におののいた。ついで、楚の子期が率いる陸軍が繁陽で呉軍に及んで、令尹子西は喜んで、今こそ実行する時だ」と言つて、ついに郢を都に遷した。そして楚国の政治を改新し、楚国を安定させた(令尹子西喜曰、乃今可為矣、於是乎遷郢於都、而改紀其政、以定楚国)(定公六年・要約)。

まずことわつておかねばならないが、『左伝』には「楚居」が伝えている某郢への遷徙記事がまったく見られず、『郢』と単称される城邑名がいくどか登場しているのみである。『左伝』の作者が「楚居」の内容を承知していたのかどうか、もちろん詮索の

しようがないが、もし承知していたとすると、『左伝』に見える単称の郢のなかには実は某郢が含まれており、『左伝』の作者が何らかの理由で、某を省略したのだという可能性も棄てきれないことになる。言い換えればその場合、たとえば前五五九と前五一九の郢は同名同地、前五〇六・前五〇五・前五〇四の郢は同名同地であることが、文意上確実であるものの、前者の郢はある某郢、後者の郢はそうではないある某郢である可能性が棄てきれないのである。

『左伝』を素直に読めば誰でも了解できると思うが、右に掲げた五つの記事、及びこれに先立つ(黄の人は言った)郢からわが黄までは九百里もある(僖公十二年)、公子燮と子儀がクーデターを図つて、郢に築城し、…(文公十四年)、という二つの記事を時間順に並べた上で、それらの郢がどこかへ遷徙したという記事がこの間まったくないという事情を前にすると、春秋前期以降、前五〇四年の都への遷徙まで、郢の位置には変化がなかったという認識しか生じようがない。楚国歴史地理研究は、こと『左伝』を使用する限りにおいては、この認識を大前提としてきたはずである。それが、もし右に示したように、そのうちのある郢はある某郢、ある郢はそうではないある某郢であり、たがいにどちらも「某」が省略されているため、実は異名異地であったにもかかわらず、一貫して同名同地であったという誤解がそこに生まれざるをえない、ということになると、そもそもの大前提が崩れて、春秋時代の郢を云々する手段として、『左伝』の記事はもはや意味をなさなくなる。これは大問題である。

再三再四逡巡せざるをえないところであるが、ここでは『左伝』に見られる単称の郢は同名同地の一つの郢であり、前五〇四年までその位置に変化はなかったという、従来通りの認識に従いたいと思う。確たる自信があつてのことではないのであるが、そう考へてこそ「楚居」が闔廬入郢事件の郢を「郢」と単称している理由が、より整合的に理解できると思われるのが、第一の理由なのである。

さて、右に挙げた五つの記事の通り、郢に築城工を試みるなどして侵攻に備えていたにもかかわらず、前五〇六年、ついに呉軍の侵入を許し、呉軍の撤退によつて翌年には回復したものの、その翌年にはまたもや呉軍の大攻勢がはじまり、とうとう郢を都に遷徙せざるをえない事態となつた。

楚国はいうなれば滅亡の危機に瀕したのであるが、滅亡とは宗廟などの宗教組織が破壊されて、祖先以来の血統が絶たれることを意味する。それを回避するためには、都城のもつ宗教組織や都市機能そのものを、現在の城邑から別の城邑に遷すしか方法がない。そうすれば、呉軍が旧都城に入ったとしても、宗廟などは新都城に遷されており、別の地で血統を継承することが可能なのである。それに、新都城への遷徙は、内乱・外圧の双方によつて長年月続いてきている政治的混乱を、一挙に解消する重要な手段でもある。令尹子西たちは、このような抜本的方策の実行機会をかねてから伺つていたのであるが、呉軍の二度目の大攻撃が確実となり、人々が恐怖に襲われた時点こそが、逃すことのできない絶好の機会となつた。――『左伝』定公六年の一文の意味は、大要こ

のようなものであろう。

郢を都へ遷徙したというこの事件は、「楚居」が伝える、楚王本営の某郢への一時的遷徙とは質をまったく異にしていると考えねばならない。それは、都城がもつ本来の宗教組織・都市機能そのものを別の城邑に遷徙するという、文字通りの「遷都」であつた。その本来の宗教組織・都市機能をここまででない続けてきていたのが、『左伝』が僖公十二年の条以来、一貫して「郢」という単称でもつて表示してきた都城であつたわけである。その郢に呉軍が侵入し、翌々年には、さらなる侵攻を前にしてついに都城の全機能を別の城邑に遷したというのであるから、楚国史上の大事件である。『左伝』が三年間の記事にわたつて、一連の経緯を詳細に記しているのは、事件の重大さを思えば、しごく当然と言えるであらう。

以上の三つの問題に対する議論が、大筋において誤りないものとすれば、「楚居」が伝える闔廬入郢記事の郢は、武王創建の郢でなければならぬ。その郢は武王創建の時点から昭王時代の闔廬入郢事件まで、一貫して都城としての機能を果たし続けていたのである。「楚居」のこのような認識は、つまり『左伝』の認識とほとんど同じことになり、それぞれの歴史地理的認識を相互に認証づけていることになる。『左伝』がはたして「楚居」の内容を承知していたかどうかはともかく、数回の記事において「郢」と単称している城邑は、武王の創建以来、闔廬入郢事件まで一貫して都城の機能を果たしてきた、その城邑を指しているといつてよいのである。







考えてみれば、「楚居」は、武王が疆涅之披に造成工事を施して居住地を確保したため、その楚王と人々の居住地を「郢」と呼んだと記し、その後、数多い某郢を列挙したのち、闔廬入郢事件の部分にだけに「郢」という単称を使用しているのであるから、語句の用例からいっても、武王の郢と闔廬入郢事件の郢が同名同地であるというのは、きわめて自然ではなからうか。もしこの二つの郢が異地であるにもかかわらず、いずれにも「郢」という単称表記が与えられていたならば、それは「楚居」を読んだ楚国の人々に対して、あまりにも不親切な措置だといわねばならない。

なお闔廬入郢事件の翌々年都に遷都してのち、この武王以来の都城がどうなったかという点については、『漢書』「地理志」をはじめとする史書は、ある時点で再び都城機能が旧地にもどされ、以降長年月にわたり再び都城として存続したと考えている。この理解はおそらく正しいであろう。というのも、闔廬入郢事件が発生したのは昭王の時であるが、「楚居」が昭王の孫である王太子(簡王)の時に「疆郢」に遷ったと伝えているからである。この疆郢は、武王創建以降闔廬入郢事件まで存続してきた「郢」のある部分なのであるから、疆郢への遷徙は、結局「すでに」郢」が回復されていたことを意味してはならない。もはやここまでくれば、より一段進んだ推測を提出してもよいと思う。それは、武王創建の郢は、都城全体を指す場合は「郢」と単称するのが一般的であったと思われるが、とくに為郢の部分・疆郢の部分の部分を指定して指す場合は「為郢」・「疆郢」と某郢称謂で称するのが一般的であった。もちろんこの原則が守られない例

もあつたであろうが、一応これが通例ではなかつたらうか。という推測である。

王太子(簡王)以降の楚王も、いくどか某郢への遷徙を実行しているが、その間もこの武王創建の郢は都城としての機能もつて存続したにちがいない。『包山簡』や『新蔡葛陵簡』に郢と単称されている城邑はつまりこの郢であり、前二七八年に秦軍の攻略によって陥落した郢ももちろんこの郢であろう。この点、「楚居」は武王建造のその城邑は郢と呼ばれることになったが、その郢という称謂は今に至るまで継続している」と記しており、とすればその語気からして、武王の郢は「楚居」を読んだ人々の時代まで一貫して存続していた可能性が高い、という守彬氏の意見をぜひとも参考にしなければならぬ(守彬)。

季連・穴熊にまつわる伝承、熊繹にまつわる伝承、宵囂が宵に到達したという伝承、武王が郢を創建したという伝承、呉軍が郢に侵入したという伝承、これらの伝承からうかがい知ることのできる戦国楚国の人々の歴史地理的認識が、楚国歴史地理の懸案問題の解決に、手段としてどのような影響を与えるかを、(1)(2)(3)(4)と順をおって以上に論じてきたつもりである。議論が一部煩瑣になってしまったことは反省しなければならぬが、結果としては、本節冒頭に示した、楚国歴史地理の懸案問題に対する目下の私案を、大きく揺るがすことにはならなかつたと言つてよいであろう。

## 結

以下には、本稿の執筆を終えた時点での、楚族の遷徙経路についての腹案を概略的に示すことで、結語に代えたいと思う。

のちに楚国を創設することになる楚族は、本来、陝西省東南部・河南省西南部・湖北省西北部⇨漢水上流地区の、ある河川の沿岸のある拠点を根拠地とする一族であった。それがしだいに、水運を使って他の沿岸拠点の種族と関係をもつようになり、一種の地域的結合体を形成した。季連と妣佳との婚姻伝説、穴熊と妣鬻との婚姻伝説は、そのような他種族との結合を反映しているであろう。熊繹時代の都との結合もその一つであるが、都とのかわりの過程において、楚族自身がある種の祭祀組織を創設したと思われることは重要である。政治的な結合、経済的な結合、文化的な結合、それとともに祭祀宗教的な結合があいまって、その地域的な結合体により強固に形成されていくからである。この地域的結合体の形成において、楚族はしだいに主導的な役割を果たすようになったにちがいない、その意味においてこの情況は、楚国形成の第一歩といえることができる。

楚族の本来の根拠地が位置していた、そのある河川がいったいどの河川であったのかは明らかにしたいが、漢水北側の河川の一つであったことは、まちがいないのではなからうか。丹江はそのもっとも有力な候補であり、既存文献伝承が伝える西周時代の居地丹陽が、その地名の由来をおそらく丹江流域にもっていること、熊繹時代の都の位置が淇河が北から丹江に流入する現在の浙

川県寺湾鎮一帯にあったと想定されていること、丹江流域の商南県過鳳樓遺跡からいわゆる楚式鬲の原初形態とおぼしき陶鬲が出土していることなどが、その証拠としてあげられる。いずれにしても、陝西省東南部・河南省西南部・湖北省西北部⇨漢水上流地区、とくに漢水北側は、北の文化と南の文化、東の文化と西の文化、そして陸運と水運が交接する地域であった。そのような異なった文化、異なった気風が交接するところには、進取の気質に富んだ人々が出やすいものである。南陽かあるいは浙川出身と伝えられる、かの范蠡は、その代表的な見本である。のちに強大な楚国、華麗な楚文化を生み出すことになる楚族が、本来そのような地に拠った、進取の気質に富んだ種族であった可能性は、十分に考えられてよいであろう。

その後、楚族は漢水を南に越えて、湖北省西北部の荆山から沮水・漳水にかけての地域に南下したと思われる。当時において南北文化交往のもっとも重要なルートであった、襄陽―棗陽―随州―武漢という、随棗ルートに入っていくことがなかった理由は、おそらく単純なものであって、そこには鄧・随(曾)・鄂などの、殷系文化・周系文化をもった強大な勢力が割拠しており、進入がもとより不可能であったからである。言い換えれば、楚族は漢水西側の荆山東麓を南下することを余儀なくされたわけではあるが、他面このことは幸いにも、荊州地区という長江中流の重要な基地を掌握しうる可能性をもたらすことになった。しだいに南下して、宵敖に至って宵に到達するのであるが、この宵は襄陽―荊州を結ぶ幹線陸路上の要地であり、そこは荊州地区を指呼の間に

望む、絶好の戦略拠点に他ならない。

\* 議論のなかでは引用しなかったが、漢水北側から漢水南側への南下については、見落とすことのできない記事が存在する。それは『新蔡葛陵簡』にみえている「昔我先出自郢、適宅茲沮・漳、…」(甲三・一一・二四)という記事である。この郢と「楚居」季連伝承の洑水の洑は、前者は邑に従い後者は水に従っているものの、「川」の部分共通している。つまり前者は洑水流域の城邑名、後者はその河川名そのものともみてまちがいない。次の適は、何琳儀氏に従ってその適と郢の間で断句して動詞に読むべきであり(何琳儀)、宍に従っているのであるから、「移動する」という字義にとるべきであろう。つまりここは、「我が祖先は郢(洑水)から出ている。そのち移動して、沮水・漳水の地に居を構えた」という文意にとらねばならない。とすると、郢(洑)水と沮水・漳水の地は、相応に離れていなければならない。したがって沮水・漳水が漢水南側である以上、郢(洑水)は漢水北側である可能性が高いと思うのであるが、いかがであろうか。

こうして次の武王の時に免に到達し、以降、春秋戦国時代を一貫して楚国の都城として機能し続けることになる郢が、ここに創建されることになった。漢水北側を出発して以来、長期間にわたって南下してきた楚族の人々は、ここにいわば定住の地を定め、郢は楚国の都城として、その長い繁栄を始めることになったのである。都城の建設といい、王号の開始といい、長期間にわたる一種の民族移動の一応の終了といい、武王時代こそは楚国形

成の一つの段階が完了した時代であった。この武王に至るまでの楚国の形成を、第一次楚国の形成と呼ぶことにしようと思う。

もともと、その郢はたしてどこであったのか、依然として謎のままである。第一次楚国の形成過程を以上のように回顧する限り、荊州地区以外のどこかに求めざるをえないと思うが、にもかかわらず、季家湖楚城や蔡橋遺跡、そして紀南城など、荊州地区の関連遺跡がいずれも決め手を欠いているのは、この点、まことに残念である。

武王の次の文王以降、楚国は漢水東部、さらには淮水流域から中原地区へと支配領域を拡大し、伝統ある古国を次々と支配下におさめていくことになる。その広大な領域をもった楚国の形成は、第一次楚国の形成とはおのずから質を異にしているはずであり、この文王以降の楚国の形成は、第二次楚国の形成ということができらるであろう。

文王以降、歴代の楚王はその居地をしきりに移動させた。「楚居」が伝えている十数回に及ぶ某郢への遷移はその例である。しかし、その移動は武王時代までのような種族の移動をとまなうものでもなく、都城機能の移動をとまなうものでもなく、何らかの理由による楚王本営の一時的な移動に過ぎなかった。その理由の第一はおそらく軍事作戦上の理由であり、この意味において、その移動はいわば大本営の臨時的移動と言い換えることが適切であろう。何回にも及ぶこのような移動の間も、武王創建の郢が一貫して都城の機能を継続し続けていたことは、いうまでもない。

それにしても、武王時代における荊州地区の掌握を画期として、

楚国が漢水東部・淮水流域・中原地区へと急激に支配圏を広げていくことができたのは、なぜであろうか。それは荊州地区から漢水中流へという、ごく短い距離での漢水への到達が可能になり、漢水の水運権の掌握が容易になったためではなからうか。楚族はもともと水運に長じた種族であったと考えられるのであるから、この水運権の掌握は、彼らの飛躍的發展を促すことになったであろう。「楚居」が伝える某郢のいくつかは、漢水沿岸の要港にちがいないとひそかに推測しているのであるが、その推測の根拠の一つはここに存在するのである。

以上の腹案を実証づけるには、そうとう精密な議論を必要とするが、今のところ議論どころか、該当する現地にいつてその地勢を見たり、現地所蔵の考古資料を考察するのがせいぜいである。末尾に掲げたのはその現地調査報告類の一覧であり、もし御覧いただければまことに幸いである。

最後に、石泉学説の来しかた行くすえを整理して本稿を締めくくりたいと思う。

武漢大学故石泉教授の学説は、次の三つの意見を骨子としている。

- 一、西周時代の居地丹陽は丹江流域にあり、当初は上流の商州あたりにあったが、西周中ごろに下流の浙川あたりに移った。
  - 二、春秋戦国時代の都城郢は、春秋初めの武王以降、前二七八年の秦軍による陥落まで、一貫して宜城楚皇城であった。
  - 三、その楚皇城は、そのまま秦・漢の南郡江陵県城となった。
- 近年長江中流域から大量に發現している秦・漢時代の簡牘資料

を読むかぎり、秦・漢の江陵県城が荊州地区にあったことは明白であり、宜城楚皇城であったとする三の意見は否定されざるをえない。本稿で述べたとおり、宵囂の宵が現在の荊門市の北方、子陵鋪・石橋鎮一帯であるなら、楚皇城が郢である可能性はかぎりなく低いものになり、二の意見もまた否定される可能性がきわめて高い。そうすると、残るは一の意見だけになってしまうのであるが、本稿での議論が正しいとするならば、どうやら当分の間はその学説的価値が保持されそうである。石泉教授四十年の学問大系が、このように検証されていくのを見るにつけ、学恩をこうむった者の一人として、いささかの感慨を禁じることができない。在天の先生は、この情況をどのように御覧になつておられるであろうか。「楚居」を読むにつけても、往時の先生の温容が、なつかしさとともにしきりに浮かんでくるのである。

#### 引用論著一覧(引用順)

- 凡国棟「清華簡《楚居》中与季連有関几个地名」(《楚文化研究論集》第十集)。  
 丁四新「郭店楚竹書《老子》校注」(二〇一〇年・武漢大学出版社)。  
 二二五・二二六頁。
- 陳偉「郭店楚簡別釈」(二〇〇二年・湖北教育出版社)二二頁。  
 劉樂賢「讀清華簡札記」(武漢大学簡帛網・二〇一一年一月一日)。  
 趙平安「《楚居》的性質、作者及写作年代」(《清華大学学报》二〇一一年四期)。  
 小寺敦一「清華簡『楚居』にみえる楚王居の移動について―楚国領域觀の成立に関する試論―」(復旦大学文史研究院、プリンストン大学東アジア学部・研究所・東京大学東洋文化研究所国際学術會議：小寺発表論文)。  
 小寺敦二「先秦時代系譜編纂の成立過程とその意義」(《歴史学研究》)にほどこ



く掲載予定の二校コピーを小寺氏自身から頂戴した。あつく御礼申しあげたい。

劉彬徽「関于清華簡《楚居》的思考(之一)」(『楚文化研究論集』第十集)。

高崇文「長江流域青銅文化研究」(二〇〇二年・科学出版社)。「二、長江流域礼制文化的发展」。

趙叢蒼主編『城洋青銅器』(二〇〇六年・科学出版社)。「第三章、相關問題研究」。

黄鳴「从《楚居》的聶耳、伝説看商周之際的楚国地理与史实」(武漢大学簡帛網・二〇一一年・二月・二二日)。

黄錫全「楚武王(郢)都初探——讀清華簡《楚居》札記之一」(復旦大学出土文献与古文字研究中心網站・二〇一一年五月三十一日)。

趙平安2「試析《楚居》中的一組地名」(『中国史研究』二〇一一年一期)。

陳朝霞「从近出簡文再析都国歴史地理」(『江漢考古』二〇一二年四期)。

鄭威「(史記・楚世家)熊渠三子史料性質小考」(『江漢考古』二〇一一年一期)。

王紅星「楚郢都探索的新線索」(『江漢考古』二〇一一年三期)。

程少軒「談談《楚居》所見古地名、宵、及相關問題(武漢大学簡帛網・二〇一一年五月三十一日)。

石川三佐男「近年の楚辭研究に見る多彩な成果と新たな動向について——楚辭中の帝辞と呉楚戦争教訓詠の復元的研究——」(『中国出土資料研究』第十六号)

同「楚昭王の人物事跡考——楚辭天問篇成立の政治的きっかけを作った楚王「失格」の王——」(『出土文献と秦楚文化』6号)

張碩肖洋「从清華簡《楚居》看楚昭王時代楚国都城的遷徙」(『楚文化研究論集』第十集)。

守彬「从清華簡《楚居》談×郢」(『楚文化研究論集』第十集)。

何琳儀「新蔡竹簡選釈」(『安徽大学学报・哲学社会科学版』二〇〇四年三期)。

\*李学勤・李守奎氏らをはじめとする清華大学グループの清華簡の関する論考は「古代簡牘保護与整理研究」(二〇一二年・中西書局)「清華簡整理研究專題」にまとめられている。

著者関連報告類

谷口満「楚族の故郷を探し訪ねて——縮酒之郷・南漳——」(東北学院大学「アジア流域文化論研究」I)。

同「続・楚族の故郷を探し訪ねて——丹江Ⅱ石泉ルートを行く——」(同右Ⅲ)。

同「三足鼈の故郷——談談丹陽的地望——」(『石泉先生九十誕辰紀念文集』)。

同「楚都丹陽探索問題の行方——丹江口大ダム一帯の考古新知見によせて——」(『東北学院大学論集・歴史と文化』四四号)。

同「襄樊博物館所蔵楚国青銅器珍品二件——楚文化淵源探索の新資料——」(東北学院大学「アジア文化史研究」一一号)。

同「襄陽再訪記——襄陽・老河口・穀城・宜城に楚式鬲を訪ねて——」(東北学院大学「アジア文化史研究」VIII)。

同「試論清華簡《楚居》对于楚国歴史地理研究的影响」(『楚文化研究論集』第十集)。

同「談談秦節永安鎮与涪陵小田溪出土的珍奇巴文化青銅器」(夔州文化暨重慶歴史地理專業委員会「第六届年会」論文集)。

〔付記〕報道によると、二〇一二年六月十八日、宜昌市白洋鎮の工事現場から十一件の青銅鐘と一件の青銅鼎が発見された。いずれも西周中晩期のものであるという。その鐘の一つに、楚季宝鍾厥孫乃猷公公其万年受厥福」という銘文が刻まれており、劉彬徽先生や高崇文先生など、専門家たちの熱い視線をあびていると伝えている。いうまでもなく、銘文からして西周時代の楚器であることはまちがいない、鄂西西周楚文化の資料的空白を埋める貴重な発見に相違ないからである。(『荆楚網』二〇一二年八月二〇日付け)。一日も早い報告の公表を望みたい。

※本稿は、科学研究費基盤研究(C)「楚式鬲からみた楚文化の形成と展開及びその変容」による研究成果の一部である。